
だいぼうけん

ロボ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だいぼうけん

【Zコード】

N61860

【作者名】

ロボ

【あらすじ】

「いとこ」どうしで幼なじみの、高月周哉と高月遼。5年生の夏休み、二人で東京に遊びに行くことに。こどもだけでの、はじめての旅。けれど出発当日にいきなり旅行を止められて、二人は家出をすることに。楽しい旅行のはずが、旅先で誘拐されてしまい…？完結しました。

第一話 そんなはじまり（前書き）

いとこじりしで幼なじみの、高月周哉と高月遙。5年生の夏休み、二人で東京に遊びに行くことに。じどもだけでの、はじめての旅。けれどなんだか、おかしな雲行きで…
小学生一人の推理です。

第一話 そんなはじめ

休みの日はいつもベッドのなかでソラリソラしている。半分寝たまま、とるとろす」す。

とくに今は夏休みだ。学校のない日がずーっと続く。ということは、こんな幸せな日が毎日続くということだ。けれど先生も、こんなぐうたらな毎日を生徒に送らせなこように、ちゃんと陰謀を巡らせていく。

そしてその陰謀の手先の声が、窓の外から聞こえてくる。

「しゃーちゃん、時間だよー。」

聞き慣れた声。そう、いつもどおり、遙のやつだ。

「うるさいなあ……」

ふとん代わりのシーツをひつかぶつて聞こえないふり。

「起きてよ、しゃーちゃん！ ラジオ体操の時間でしょーー。」

躍立てるハルの声を無視して、ぼくはベッドにしがみつく。と、ドアが開いて、

「しゃーちゃんつ！」

叫び声とつしょに、衝撃が走った。

「うぐつ」

「起きてよー起きてよーー」ぼくの上で、ハルがばたばた暴れる。両側で結んだ髪が、ほんほん揺れてる。

「なにすんだよつ！」

「起きない方が悪いんでしょーー。」

「重いからじけつ！」

「ひどいよ、私重くなんかないよー。」

「わかつたから降りろつー！」

まだ何かいいたそうなハルを追い出し、いやいや着替える。

半分寝たまま外に出ると、母さんとハルが話していた。

「いつもありがとうね、ハルちゃん。しゅーくんのお守りも大変でしょ~」

ちゅうと待った。それには異議がある。

「お守りしてるのはこいつのまつだ……」

「なーにいつてるの、こいつも起こしてもらつて」母さんが、ひらひらと手を振る。

「起こしてもらつてるだけだー!だいたい、ハルだつてほんとは朝全然起きないじゃないか!どうしてぼくを起こすときだけ早いんだよ!」

「おかーちゃんがおこしてくれるもん!」

「……」

ぼくは、ちらりと母さんの方を見た。

母さんも朝が弱い。

「いいじやないの、ちやんとハルちゃんに起こしてもらえるんだじ。こーんな可愛い子に毎日起こしてもらえるなんて幸せ者よ?」

……かーさん、逃げた。

「それより、早くしないと遅れるよ?」

いわれて時計を見た。5分前。

ぼくはハルと顔を見合させ、それから、

「やばつ、遅れるつ!」

玄関から慌てて飛び出した。

一足先に出たハルが、ぼくの方を見て叫ぶ。

「しゅーちゃん、早く早く!」

「わ、バカ、前!」

「え?」

叫んだときには遅かった。

前にあつた自転車に、ハルがぶつかって、みじかにひびく。

ああーあ、ぶつかった……

「ドジ

ひとことだけいってやる。

「つづー……」

不満そうなハルに、手を貸してやる。

「ほり、いくぞ」

「……うん！」

握り返してきたハルの手を引いて、ぼくはまた走り始めた。

公園からの帰り道、ぼくはハルに聞いてみた。

「そう言えば、今年はうちはどこにいくの？」

ラジオ体操で押してもらったスタンプをふりまわしながら、ハルが口をとがらせる。

「それがさー、今年は忙しいからってどこもつれてってくれないんだよ。ひどいよー、たのしみにしてたのにー！」

「うえー……」

ぼくの家とハルの家は、毎年一緒に旅行に出かけていた。

今年ハルの家がどこにも行かないって事は、つむじむといかな
いってことだ。

「今年は旅行なしか……」

「そのことなんだけど」

ふいに、ハルが口を開いた。

「とーさんとかーさんが忙しいから旅行に行けないんだよね？」

「……うん

「だつたらさー……」

遙がここにこと笑ってる。目なんかきらきらとかがやいてる。

こんなとき、たいていとんでもないことを考えてるんだ、遙は。身構えるぼくに気づいたかどうか、遙は元気いっぱいに言つた。

「わたしたちだけでどつかいけばいいんだよー」

「ほくらだけで？」

「もう一五年生なんだし、それぐらいこどもになると黙つよ

「……ハルと一人で旅行か。

「……おもしろねう！」といふね！」

「じゃ、決まり！」

うれしそうに、遙が叫んだ。

「どうで、どこにこきたいの？」

「うーんと……」

相変わらずスタンプ帳を振り回しながら、ハルが考える。

「東京がいい！」

「東京？」

「うん！ディズニーランドとか、テレビ局とか、渋谷とか。いつもテレビに出てるのとおんなじといつてみたい！」

「……でも、それは遠いよ。泊まらなきゃいけなくなるし、そうすると父さん達に許してもらえるかな？」

「行つてみなきゃわかんなによ？」

「……でも……」

「あー、怖いんだ？」

ハルが、ほくの顔をのぞき込んで囁つた。

「え？」

「怖いから、行きたくないんだ？」

「ばか！怖くなんかないよ！」

「怖くないんだつたら、一緒に行へよな？」

「ああ！行くよー！」

そこまで囁つて、自分が乗せられたこと元気づく。

遙はにやつと笑つて、

「じゃ、決まりだねー！」といつた。

うちの前につべ。すぐとなり、「つかとおんなじ『高円』の表札。ハルの家だ。

むかしここにあつたおじいちゃんの屋敷を、兄弟一人で分けてそれぞれ家をたてたんだそうだ。

だから、ぼくとハルはいとじいことになる。

「じゃ、すぐに父さんに話してみるよ」

「じゃ、またあとでね！」

そう言って、家の前でぼくはハルと別れた。

「だめ」

ぼくの頼みに、父さんは簡単に答えた。

「どうして？」

「子供たちだけじゃ危ないだろ。おまえだけならともかく、ハルちゃんに何かあつたらどうするつもりだ？」

「……でも、ハルも行きたいって……」

「ダメっていうたらダメっ！だいたい、ハルちゃん家が許すはずは

……」

そこに、ハルが飛び込んできた。

「うちはOKだって、しゅーちゃん！」

ナイス、ハル！

この攻撃に、父さんは少しひるんだみたいだった。

「でもハルちゃん。おじさん達が心配しなかった？」

なんとか状況を変えようと、とうさんが誘導尋問する。

「ううん。『しゅーくんが一緒だったら、安心ね！』とかおかーさんがいって、ヒーさんが『それもそうか』って

期待を裏切られて、父さんが頭を抱える。

「とにかく、うちは……」

そこまで父さんがいつたところで、玄関のチャイムが鳴った。

「誰だ？」

「久しぶりだな。わしだよ」

玄関を開けると、少しあせたおじいさんがたつていた。

「父ちゃん！」

父さんの父ちゃんって事は…

「おじいちゃん？」

「おお、周坊にハルーひさしふりだな！」

作戻じいちゃんは、顔中をしわにして笑った。

おじいちゃんは、昔大きな会社をやつていた。

そのいのねじいちゃんはここに住んでいて、ぼくもほんとに小さか

つた頃はよくつれてきてもらつた…らしい。

やがておじいちゃんは会社を辞めたが、そのとき会社を息子達には
つがせなかつた。

そのかわりに家を息子達に譲り、自分はここから少し行つたといふ
に小さな家を買って、そこに引っ越し込んで暮らしていく。

けれどいつやつて、たまに遊びに来るのだ。

「とにかく、なにかもめとつたようだが」

おじいちゃんの言葉に、お父さんが困つた顔をする。

「……ねえ、しゅーちゃん」

ハルがそつとぼくに話しかける。

「わかった」

それだけいつて、おじいちゃんに話しかける。

「じつは……」

話を聞き終わつたおじいちゃんは、大笑いした後、

「なあ、和明。せつかくこの子らが一人でどこか行きたいなんて言
い出したんだ。行かせてやつたらどうだ?」

予想どおり、父さんを説得にかかりた。

「しかし、子供たちだけでは……」

「一人とも、もう五年生だらう。そろそろ自分たちだけで旅行ができるだらう。だいたい、わしが若い頃には……」

ハルと顔を見合わせて、にんまり笑う。

おじいちゃんが「わしが若い頃には」つていいだしたら、父さんがかなうわけがない。

やがて父さんが、あきらめたように首を振った。

「わかりました。わかりましたよ。確かに、そろそろ親離れさせた方がいいかもせんしね」

「……じゃ、行っていいの？」

「まあ、しょうがないだらうな」多少きげんが悪そひに、父さんが咳く。

「やつたあ！」

ハルが叫んで、ぼくに抱きつってきた。

「そのかわり、ちゃんと宿題は済ませておへりー。」

「うん！」元気よくハルが答える。

「……おこ、ハル」

「んー？」

「ちゃんとやれよ、いつたからには。いつもみたいに、三十一日こなつて手伝わされるのは「めんだからな」

「ひどいよ、しゅーちゃん！ わたしちゃんと勉強するよ~。……ほんとならしいんだけど。

でもここでそんなこといつたら旅行に行けなくなる。
だから、

「ん。わかった」とだけ、ぼくは答えた。

第一話 そんなはじめ（後書き）

自サイトで公開していたのですが、i s w e bが今日消滅するとのことでこちらに投稿しなおすことといたしました。よろしくお願いいたします。

小さく風鈴が鳴る。

鉛筆の音だけが、静かな部屋に響き渡る。

いや、むかひとつ、小さな音が。

すうすうといつ、小さな小さな声。それにあわせて、ピンクの髪飾りが上下に揺れる。

ほくほく立ち上がりで
……川の頭をたたいた
いた！

ハルが飛び起る。

「なにすね？」

「暁一かの靈跡」

「寝るなっ！ だれのせいでこんな事になつてると思つてるんだ？」

そういうて、真っ白い宿題のページを見せる。

「う」

不満そ、うにうな

不満そうにうなつた後、ハルはあきらめたらしい。とにかくぼくの向かい側に座つて、宿題をせつせとやり始めた。

ゼウスは、こんなことになつたのか。

「くしゃれたたら

といつても、ぼくはともかくハルが勉強なんかやつてゐるわけがない。だから、ぼくが新しい問題を解き、その解いた問題をハルがせつせと書き写す、なんてことになるわけだ。

「んー？」
「……なあ、ハル」

「なんか不公平な気がするんだけど」「気のせいだよ」

「ぜーつたい、ちがうとおもうけど……」「

不満そうなぼくの声に、ハルがむきになる。

「「」ーんなかわいい子と一緒に勉強できるなんて、役得なんだよー。」本気でいつてるんじゃないことはわかったけど、それでもぼくはすこじどきどきした。

じつさい、ハルはかわいい。ちょっとおでんばすきて手に負えないし、わがまま無計画で無鉄砲でいいだしたなら聞かないけれど、性格だつて悪くない……と思つ。

でもここでうなずいたらこいつの悪いつぼだ。

「やうかな?」といつて首をかしげてみる。

とたんに、ハルがむくれた。

「かわいくない!」

後ろから、頭をぐりぐつられる。

「かわいいって言えー!」

「やだよー!」

「まあまあ、一人とも仲がいいわねえ」

麦茶を持ってきた母さんがいつた。

「仲良くなんかないよー」大きな声で言つたけど、ハルと声が重なつてしまつた。

一瞬顔を見合わせて、

「まねするなよー」

「そつちこねー」

「ふんー」

「ふんー」お互ににせつぽを向く。

「やっぱり仲がいいわねえ」なぜかくすくす笑いながら、かーさんが言つ。

「とにかく、おじいちゃんがおこわつせったの？」

「「あこわつ？」

「おじいちゃんのおかげで旅行に行けるんだから。一人とも、ちやんと「あこわつしてらっしゃい」

「はーいー」待つてましたとばかりに、ハルが答える。

「おばさんもああいつてることだし、行くつも、おじいちゃん家ー。」

「この宿題は、ハル？」

「いいの。宿題なんかより、おじいちゃんにお礼を言つ方がずっと大事だよ」

「……おまえ、やりたくないだけだら、宿題」

「……ほり、いこうよー。」

強引にハルが話を終わらせる。どうやら図星みたいだ。

「……まあ、いいか」

確かにハルが言つとも一理ある。

「帰つてきたら、ちやんとやるわ」と言つて、ぼくは立つ上がった。

おじいちゃんの家は、そんなに遠くはない。だいたい家から自転車で10分もあれば着く。

立派な門の前で、チャイムを押す。

「どちらさまですか？」

と言つて顔を出したのは、少し髪の薄くなつたおじいちゃんだった。

「伏見さんーお久しぶりですー！」

ハルが、元気に挨拶をする。

「おお、ハルちゃんに周ちゃんかー大きくなつたなあー！」

伏見さんは、おじいちゃんが会社にいたときの部下だった。おじいちゃんが会社を隠退したとき、伏見さんも会社を辞め、この近くに家を建てて隠居した。よくおじいちゃんの家に遊びに来ていて、ぼくも何度も会つたことがある。

「おじいちゃんは？」

「お部屋の方にいらっしゃいますよ。ただ、今日は体調が優れない
よつで、お部屋で横になつていらっしゃいますか？」

「……じゃあ、帰つた方がいいですか？」

「いえいえ、とんでもない。ハルちゃん達が来てくれたら、とても
よひこばれますよ」

そういうて、伏見さんは笑つた。

「それに、今ちょっと嫌なお客様がいらっしゃつて……」

「いやなお客様」

「光彦様ですよ」

「ああ……」

光彦さんは、ぼくらのおじさんにある。おじいちゃんとともにいつか
んたちとも仲が悪くて、あまり家には寄りつかない。
「だから、はやめにいって助けてお上げなさい」といつて、伏見さ
んは笑つた。

おじいちゃんの部屋に行く手前の廊下にせしかかったとき。

「出で行け！」

おじいちゃんの、すさまじい怒鳴り声が聞こえてきた。思わず、首
をすくめる。

と、ドアが開いて、40歳くらいの太つた人が足音高く歩いてきた。

光彦おじさんだ。

「あれ、おまえら……」

ここで会つとは思つていなかつたんだろう。何か疑わしそうな顔を
している。

「なにしに来たんだ？」

「旅行に行くから、」とあいをつてきたの「ハルが答える。

「旅行？」

「うん。あのね……」

「ハル、はやくおじいちゃんのところにいかなこと……」

ぼくがそういうと、ハルは急いでおじさん「あこがれ」をして、一いつ
ちに走ってきた。

寝室のドアをノックする。

「誰だ？」不機嫌そうな声。

「周哉です。遙もいます」といつと、おじいちゃんの声が和らいだ。

「おお、周坊にハルか。よう来ててくれたな！」

ドアを開けると、おじいちゃんがベッドで身を起こしていた。

ふとんの上に、古ぼけた大きなアルバムを広げている。
そのとなりには、やつぱり古ぼけた写真立てと、虹黒の写真。おじ
いちゃんが、数人の仲間達と写っている写真だ。

「あいさつにきてくれたのか？」

「うん！旅行に行けるのも、おじいちゃんのおかげだもん！」

「そうかそうか」

ハルの言葉に、おじいちゃんが目を細める。

「ところで、どんなコースで行くつもりなんだ？」

おじいちゃんがきいてきた。

「まず夜行列車で東京に行って、それからトイズ二郎山と渋谷
と…」

そういうつて、ぼくたちが立てた計画を話していく。

おじいちゃんは嬉しそうに、僕らの話を聞いていた。

旅行の話をして、旅行中に気をつけないと困ることについて

注意されて、さあ帰るうかと言つとき。

「ところで、ちょっと頼みがあるんだが

そういうと、おじいちゃんは懐から手紙を取り出した。

「これを、このひとに渡してくれんか？」

そう言って渡されたのは、ていねいな字で「仁科幸子様」とだけ書
かれた書状だった。

「本当ならわしが渡すんだが、今ちょっと手が放せない用事がある。あっちの方に行くな、ついでに渡しておいてほしい」

「場所はどこなの？」

「こりうと、やっぱりていねいな字で書かれたメモをくれた。

「……せただに？」

「せたがやって読むんだよ」

「世田谷つて、ぼくらが行くところから少しはずれてるよ。」

ぼくの質問に、おじいちゃんは、

「もちろん、こっちの頼みなんだからお小遣いは出すよ。」

「うん、わかった」

ハルが即答した。

「……おい、ハル……」

「だつて、おじいちゃんには助けてもらつたし、お小遣いくれるならそれ位したつていいじゃない」

「迷子とかにならないかな？」

「だいじょうぶだよー！」なんの根拠もなしに、ハルが断言する。

「まあ、いいか。おじいちゃんには助けてもらつたし」

そう言つて、うなづく。

「ねえ……おじいちゃん。これつて、ラブレター？」

ハルがとんでもないことをこいつ。

「さて、どうだろうね？」

おじいちゃんが、くすくす笑う。

「ばか」そういって、遙をいじづく。

「あんまり失礼なこと言つくなよ」

「だつて……」

「それじゃ、おじいちゃん。手紙はこの人に渡せばいいの？」ハルを無視して、おじいちゃんに聞く。

「ああ。なるべくなら手渡しで渡してくれ

「うん、わかった！」

なくしあやうといけないし、なるべく早めにわたさないといけない

かな。

「やれじや、『氣をつけてな……』」

おじこちゃんの声を背に、ぼくらは部屋を出た。

「よこよこ出発だよ。ぼくとハルは、ぼくの家の出発パーティーに呼ばれていた。

「ハル、楽しそうだな」

「だつて、やつと旅行に行けるんだよー」「わかった声が返つてくる。

「まあかあの宿題が終わるとせ思わなかつたよな……」

「がんばつたもん!」

「解いたのは全部ぼくだし、印したのも半分はぼくだね」「ぼくのつっこみに、ハルが頬を膨らす。

「いじのー・とりあえず終わつたんだからー。」

「確かに……」

うなずいて、隣の荷物を見る。

「もう、忘れてる」となによね?」

「ぱつちつだよ」

「ホテルも電車も予約取つてあるし、父さんから旅行の許可書ももらつたし、荷物も全部詰めたし。あとはもう出発するだけ!」

相変わらず楽しそうに、ハルが言つ。

「たのしみだな、しゅーちゃんと一緒に旅行……」

「それにしても、おとーさんたちおやこね……」

足をぶらぶらさせながら、ハルが呟く。

「はやくしなこと、」はんをめぢやつよ

テーブルの前には、空席が四つ。父さんと母さんと、おじさんとおばさんの席だ。

一時間くらこ前に、急におじこちゃんから呼び出しがあって、お父さん達は全員出かけていった。

「なにがあつたのかな？」

「会社の人や、おじさんたちも、みんな呼び出せられてるみたいなんだけど…」

確かに、ちょっと遅かれる。

「電話してみる?」とこつて立ち上がつたところ、勝手口のドアが開いた。

「あ、やつと帰つてきた」

「父さん、おかえり…」

いいかけた言葉を、途中で飲み込んだ。

父さんも母さんも、おじさんもおばさんも、今まで見たことがないよつな顔をしていた。

「…どうしたの?」おもむおもむきこしてみる。

「…ああ、なんでもない」すぐわかる嘘を、お父さんがついた。

「…だつたらいいけど…」いつこつとき、父さん達を問いつめたつて無駄だ。

だからほくはなにもきかず、「せやぐ」はんこしよつよ。電車に間に合わなくなるよ」といった。

すると、父さんは一瞬すまなよつな顔をして、それから、

「ふたりとも、今度の旅行は中止だ!」といった。

一瞬、父さん達が何を言つてこるのかわからなかつた。

「どうこりつこと?」

やつぱりけげんやつな声で、ハルが聞いた。

父さんは少し苦い顔になつて、

「とにかく、今は旅行に行くな。頼むから」とだけ言つた。

「どうして!」

「あとで説明するから。とにかく、行っちゃだめだ」と、父さんはそれだけを繰り返した。

「だつて、準備も全部済ませたし、予約も取つてあるし…」「ひどいよ！せつかくがんばったのに…」

「とにかくダメだ！」

結局、それから何を言つても、旅行に行かせてはもらえなかつた。

さんざん泣いて怒つて、いやになつてベッドに倒れ込む。明かりを消した部屋で、ぼくは寝返りを打つた。

ねむれない。

腹が立つてしようがない。

横には、すっかり準備の終わつた旅荷物。あれだけがんばつて、宿題も終わらせて、旅行の手配も全部自分達でやつて、まあこれからつて時に、いきなり行くなんて！

「ハルはだつしてゐかな……」

ぽつりとつぶやいて、向かいの遙の部屋の方を見たとき。こんこん。

窓をたたく小さな音。

「……ハル？」

窓を開けると、予想通りハルの顔。そして：

赤い大きなボストンバッグ。両側でまとめた髪に、Tシャツにスカート。

おでかけのかつこうだ。

「どうしたの、そんなかつこうで」

ぼくの質問に、ハルはきつぱりと答えた。

「わたし、行くからね」

「……やつぱり？」ハルの性格からいつて、だいたいこうなるひとは思つていたけど、それでも聞き返してみる。

「だつて、納得できないよ！理由も言わずに、いきなり行くなん

て！」

「ハル、おこひでる。たぶんこれじゃ、とめたつてむだだ。
だから……」

「そつか」とだけいって、リコックを担ぐ。

「しゅーちゃん……」ハルが、不思議そつな顔でぼくを見た。

「……行くんだよね？」

「……行ってくれるの？」ちよひとと上田遣いで、ハルがぼくを見る。

……そういう田で見るの、あること理づ。

ちよひと田をそらす。

「ぼくだつて、あれじゃ納得できないよ。ハルは言に出したら聞かないし。だいたい、こんな面白田をうなじこぼせないつもつ？」

「……おこられるよ……」

「ハルだけおこられるの、かわいそうだよ。どうせなら、こっしょ

「おこられようへ。」

そうこつて、ハルの手を取る。

ハルはちよひと赤くなつて、小さくうなずいた。

「今、おじさん達はぼくの家のぼうこるんだよね？」

「うん。なんか難しい顔して話してみみたい」

「じゅ……」

「うん」顔を見合させて、うなずきあつ。

屋根をぬつて、ハルの部屋に。

それから、足音を立てないよつて、やうつやうつと階段を下りてい
く。

階段の陰から顔だけ出しつて、おじさん達がいなか確かめる。

「……いいよ。出で」

ハルに合図して、玄関へ。

やつぱり音を立てないよつて、やうつやうつと鍵を回す。

そつとドアを開け、静かにしめる。

「つしろをふりかえりながら歩いて、家から十分離れたところで、ぼくは立ち止った。

「うまくいったね！」

嬉しそうなハルの声。

「……だいじょうぶかなあ」不安なのが声に出たらしく。

「しゅーちゃん、考えすぎ！」ハルが笑い飛ばす。

（ハルは考えなさすぎだ……）と思つたことは、もちろん言わない。

「せつかく遊べるんだから、くよくよしてたら撃だよ！」

「やうかな」わなながら、疑わしそうな声。

「やうだよー！」

断言をれてしまつた。

「とにかく、あとのことと考へても樂しくなによ。」いつのときもせ、面白いことだけ考へてればいいのー！」

「そうだね」

確かにハルの言つとおり。あとのことと考へねばいいか。

「じゅ、こーーー！」

ハルがぼくの手を握つて、楽しそうに走り出す。

なんだか楽しくなつて、ぼくも笑い出す。

ぼくたちは笑いながら駅へ向かつて走つてこつた。

第四話 夜行列車

「東碧水」と書かれた看板のすぐ下。

赤い大きなボストンバッグの上に、ハルがちょこっと腰を下ろしている。

「電車、まだかな……」

駅のホームには、ぼくとハル以外誰もいなかった。

「それにしても、どうして父さん達、いきなり『行くな』なんていつたんだろう?」

わざわざから、ずっと気になっていたこと。

「父さんもおじさんも、そんなことするひとじゃないよ。少なくとも、ちゃんとした理由があれば説明するし、理由がなければ無茶なことは言わないと思つ。一度は旅行を許してくれたしね。なのに、どうして……」

「わかんないよ」

あつたりと、ハルがいう。

「わかんないけど、おとーさん達が無茶いつたのは本当だし。そんなに深く考へることないよ」

ハルのいうとおりかもしれない。

今ここでいへり考へたつて、ぼくらにわかるわけないんだし。

「それよりを……」

「東京つて、どんなところなんだろう?」

先回りしていつてみる。

たちまちハルがふくれた。

「わたしのせりふとらないでよ

「ハルのことがなんかわかるよ。何年一緒にいると思つてるんだ

?」
「こつてる」とわかるからつて、そんなじわるすのんじやもてないよ

「あ、電車来た！」話をそらせる。

たちまちハルがそつちを向いた。

銀色にオレンジの線の入った電車が、するするとホームに入ってきた。

ドアが開いたら走り出して、切符に書いてある席に座る。あたりにはもう何人か座っている。

荷物はしつかりと足下に置いて、用意しておいたおやつを取り出す。

「なんだ坊主ら、一人で旅行か？」

前の席のおじさんが、突然振り返って聞いてきた。お酒でも飲んでいるのか、かなり顔が赤い。

「はい」ちょっと用心しながら答える。

「どうか、えらいなー。どこにいくんだい？」それには気づかないようで、おじさんは陽気な声で質問を続ける。

「ディズニーランドに行くの」 やつぱり少し用心しながら、ハルが答える。

気が付くと、あたりから何人か人が集まってきた。

「兄妹なの？」20歳ぐらいのきれいなお姉さんに聞かれる。

「つうん、いとこ」

「そういえば、名前は？」

「高円遙！」「高円周哉です」

そう言つと、一人の態度が少し変わった。

「あの町の高円といつと、ひょっとして高円電機とか高円精密工業とか……」

「おじいちゃんの会社です」

「じゃあ、お金持ちなんだ？」感心したようこ、お姉さんがいう。

「つうん、お父さん達は跡を継がせてもらえなかつたから。そんなにあるわけじや……」

「……でもな。やつこつ」とは、あんまりひとことつもんじやないぞ

ぞ

赤ら顔のおじさんが、とても真剣な顔で言った。

「どうして？」ハルが、不思議そうに尋ねた。

「もしそんなことがわかつたら、どんなことがおこるかわからないからさ。自分の身分は隠しておいた方がいい。特に旅先では」「そうなの？」

「今だつて、その名前を聞いたとたんにこっちの態度が変わつただろう？ いらないトラブルは、避けられるなら避けた方がいいよ」「うん。わかった」

たぶん、このおじさんの言うとおりだろう。

おじいちゃんの会社に関して言えば、これまでそういったことがなかつたわけじゃない。

ハルはあんまり気にしてないみたいだけだ。

それから、一人とずっとと話をしていた。

おじさんは須崎と、お姉さんは東と名乗つた。
須崎さんは東京の会社員で、出張の帰りに電車が無くなつたからこの列車に。東さんは東京で大学に行つていて、旅行の時にはいつもこの列車に乗つていてるそうだ。

二人とも旅慣れているらしく、旅行でのちょっととしたこつや東京でいつておいた方がいいところをいろいろと教えてもらえた。

話しこんで気が付くと、時計の針は11時をさしていた。

「もうこんな時間か。それじゃ、おいたましようか」

「あんまり夜更かししないようにね」

そう言って、二人は自分の席に戻つていった。

一人が帰ると、とたんに静かになつた。

窓の外からは、かたんかたんとレールの音だけが、規則正しく聞こえてくる。

ときたま知らない駅にとまって、何人かのお客を乗せて。

そしてまた、走り出す。

窓の外、町の灯りが流れでは消える。

朝目が覚めれば知らない町だ。

「いてて！」

突然、ハルに耳を引っ張られた。

「なにすんだよ！」

「だつてしゅーちゃん窓の外見てばっかりでつまんないもん！」

「外の景色ぐらい見たつていいじゃないか！」

「わたしみれないもん！」

「じゃ、かわる？」立ち上がって、遙に席を譲る。

「そうじゃなくって！」

ハルが叫んだ。

「おーい、どうしてそんなおこつてるんだよ」

聞いてみても、ハルは顔をそむけたまま。

「…おーい、そんなすねるなよー」

こうなつたら、ハルはてこでもつこかないから。
しかたがない。

「なんでもするから。そんな怒るなよ」

とりあえず下手に出てみる。

「じゃ、ゲームしょー！」

「ゲーム？」

「だつて私たいくつだもん」

「…だから、怒つてたの？」

そういうと、遙はまたむくれた。

（たしかに、ハルを置き去りにしてたよな…）

ちょっと反省したぼくは外を見るのをあきらめて、ハルと遊ぶ」と
にした。

「坊や達、二人で旅行かい？」

いつのまにか、車掌さんが検札に来ていた。

「あ、はい……」

「ちやんと親御さんの許可は貰つてから来たの?」

「体が固くなるのがわかった。

どうしよう。

もじここで、黙つて出てきたことがばれたりしたら。

東京どころか、次の駅で連れ戻される。

そう思つて、ハルの方を見る。

「大丈夫です。ちやんと許可書もあります」

落ち着いた声で、ハルがいづ。

「見せてもらえる?」

「はい」ハルが、ボストンバッグの中から許可書を取り出す。

(すゞいな……)

そう思つたとき。

ハルが、ぼくの手を握つてきた。

思わず振り払おうとして、気がつく。

(ハル、汗びっしょりだ……)

ここでびぐびくして、もし車掌さんに怪しまれたら。車掌さんがこの電話番号に電話でもしたら、旅行は一巻の終わりだ。だから、ぼくが少しでも落ち着くように。

ハルが少しでも落ち着くように。ハルの手を、ぎゅっと握り返す。

「はい結構です」

でも車掌さんは許可書を確認すると、満足そうにほほえんだ。

「いい旅を」

とだけいって、車掌さんは去つていった。

「ハル、もう車掌さんいっちやつたよ」

そう言つて、手を離そうとする。でも、できなかつた。

ハルがぼくの手をしっかりと握っていたから。

「もうちょっと、このまま……」

「……ん」

ハルがまだちょっとだけ震えているのが、伝わってきたから。
(ハル、がんばってくれたし)

「いまだけだぞー……」

そういうて、手を握り返す。

顔、ちょっと赤い。

なんだかハルの顔がまともに見れなくて、顔をそむける。

そのままなんとなく気まずくなつて、しばらく黙つたままでいた。
でも、さつきと違つて、そんないやな気分じやない。

(……なんだろ?)

考へてもわからないうから、そのままにして、ずっとハルの手を握つていた。

しばらぐそのままでいるうちに、ぼくの肩にハルがもたれかかつてきた。

「ハル、重いよ」

そういうて、体を揺すぶる。

小さな小さな寝息が聞こえた。

「……ねちゃつたの?」

「……へんじがない。」

「……そういえば、ちょっとねむいかな……」

ぼくもハルにもたれかかる。

「それじゃ、おやすみ……」

あたりから、くすくす笑う声が聞こえる。

どうして笑うのかわからなかつたけど、起きられなかつた。

ハルの肩にもたれかかつて、ハルの手を握つたまま、ぼくはゆつくりと眠りに落ちていつた。

ぼくは、真新しい家のまんまえにたつていた。

これから、ぼくたちが住む家だ。

隣では、おじいちゃんが少し寂しそうに新しい一軒の家を見つめていた。

「おじいちゃん、だいじょうぶ?」

今よりもずっと小さなぼくが、心配そうに声をかける。

「ああ、周坊か……」

しばらくたつてから、力無い声でおじいちゃんが返事をした。

「……あの家なくなつたの、やつぱりたみしい?」

ぼくの問いに、おじいちゃんは小さく笑う。

「……いいんだ。あの家が残つても、ばあちゃんのことを思い出しだけだから。あれとの思い出が詰まつた家に住むのは、悲しそぎる」

おじいちゃんの奥さん……おばあちゃんは、半年前になくなつてしまつた。おじいちゃんはすぐ落ち込んで、しばらくは人と話すこともしなかつた。

しばらくして落ち着いたけれど、おじいちゃんはもう少しきりやる気をなくしてしまつたらしい。会社の経営を人に任せ、長年住んでいた家を引き払い、その跡地に息子夫婦の家を建てさせて、自分は少し離れたところに家を建て、楽隱居することにしたのだ。

けれど、おばあちゃんとの思い出の詰まつた家が無くなるのは、やつぱり寂しかつたのだろう。せつかくの新築祝いだとこのこと、おじいちゃんは少し悲しそうに見えた。

そのおじいちゃんの手に、小さな古ぼけた写真がある」とい、ぼくは気づいた。

なんとなく興味を引かれて、のぞき込む。

写真には、おじいちゃんといっしょに会社を立ち上げた人たちが写

つっていた。後ろには、

「高月電気機械工業」という木の看板がかかって、粗末な家。おじいちゃんも、伏見さんや他の人たちも、今よりもずっと若い。何人か知らない人もいるのは、辞めていったのかかもしれないし、亡くなってしまったのかかもしれない。

おじいちゃんの隣に、若い、きれいな女人の人人がいることに、ふと気づいた。和服を着て、ほほえんでいる。

……おばあちゃんかな？ でも……

そのとき、おじいちゃんがふいに視線をずらせた。つられて、そちら側を見る。

向こうから、お父さんとお母さんが、知らない人たちと一緒にやつてきた。

父さん達はぼくの手を引くと、一緒に来ていた人たちを紹介してくれた。

「この人達が、おじさんとおばさん。今日からおとなりさんになるんだ」

優しそうな男の人と女の人、こちらに挨拶をする。

「……その子は？」

おばさんの陰に隠れて、顔だけ半分出してじーっとこちらを覗いている女の子。

「ごめんね、この子人見知りするから」

そういっておばさんはその子を前に連れ出した。

「遙、ごあいさつしなさい」

その声に、遙と呼ばれた女の子はおずおずと前に出てきて、

「たかつきはるかです」といつて、ぺこりとおじぎをした。

「たかつきしゅうやです」と、じつちも元気よく挨拶をする。

女の子は少しうれしそうに笑うと、嬉しそうに笑ってくれた。

「この子、ずいぶん前からきょうだいがほしかったみたいだから。

仲良くしてやつてくれる？」

「うん…」

ぼくの声に、また遙は嬉しそうに笑つた……

「……てよ。起きてよ」

なんだか体ががくがく揺れてる。

「んに……」

「まーだおきないの?じゃあ…」ハルの声に、不気味な感じがして、
「むーつ、むーつ!」

いきなり、息ができなくなつた。ハルに鼻をつままれたらしく、
ハルの手を振り払つて、起きる。

「おはよ、ねぼすけさん」

「なにすんだよつ!」

「だつて、こいつでもしないと起きないじゃない。しゅーちゃん、す
つごく寝起き悪いし」

「まだ終点じゃないよ……」

「終点までいっちゃんたら、誰か待ちかまえてるかもしれないじゃ
ない。今だつて、見張られてるみたいだし」

ハルの言葉に、眠気が吹つ飛んだ。

「ど、どこにいるの?」

「三つ後ろの通路側。ほら、あの新聞紙広げてる人」

ちよつとだけ首を動かす。

大きなスポーツ新聞を広げた人が、こっちをじつと見つめている。
ぼくの視線に気づくと、その男は新聞の陰に顔を隠した。

「あやしい……」

「でしょ

ハルがうなずく。

「で、どつじよつ?」

「うーん……」

いい案が浮かばない。

とりあえずあの人を振り切らないといけないけど…

迷つていると、須崎さんが声をかけてきた。

「なんだ、坊主ら。もう降りるのか？」

「はい。ありがとうございました！」

「変な人とかについていかないようにね」

いつのまにかきていた東さんにも、心配そうにいわれる。

「そうだな。最近危ないからなあ」

あいづちをうつ須崎さんをみながら、ハルにこいつそりとひたむく。

「……ハル。なんとかなるかもしれないよ」

やがて、電車はゆっくりと駅にとまった。

アナウンスとともに、電車のドアが開いて、何人か客が降りていく。
ぼくたちはすぐに降りず、ドアのところまで見送りに来てくれた二人と話し込んでいた。

後ろに、さつきの怪しい人が待ちかまえている。

目を合わせないように様子を見ると、時計を見ながらいらいらとぼくたちが降りるのを待っているようだ。

発車のベルが鳴り、ドアが閉まりかけたとき。

ぼくとハルはドアから飛び出した。

あわててあの人気が降りようとする……が、二人の荷物に邪魔される。
そしてそのままドアは閉まった。

ドアの向こうの悔しそうな顔を見ながら、ぼくたちは顔を見合させてにんまり笑つた。

あのあとで、ぼくは一人に事情を話し、あの人気が降りるのを邪魔してくれるよう頼んだのだ。

ドアの向こうで手を振る一人に「ありがとうございました！」と
大きな声でお礼を言ってから、ぼくたちは走り出した。

息を切らして、ちょうど起きた山手線に乗り込む。

ドアが閉まり、誰も追つてきていことを確認して、ぼくたちはほつと息を付いた。

「よかつたー……」

「おもしろかつたね！」

すごく嬉しそうに、ハルが笑う。

なにを気楽な、と思つたけど、

「……うん。ちょっと、おもしろかつた」

なんか、ハルがうつてきてるかもしねない。

「まず、どこにいこう?」まだ少し荒い息で、ハルにきかれた。

「うーん……まだ、お店やさんはあいてないよね……」

「だったら、わたし少し行つてみたいところがあるんだけど」

新宿で電車を降りる。

朝のこんな時間なのに、もう新宿は人でいっぱいだった。

電車に乘る人、降りる人。

ぼくらの町なら、こんな時間に起きているのは新聞配達か市場の人ぐらいだ。

人波に逆らつて、西へと歩く。

どうやら、夜も明けたみたいだ。

東京でも、やっぱり朝は涼しいらしい。

やがて人もとぎれたころ、ぼくたちは目的の建物の前にいた。

「うわあ……」

東京都庁に、あたりのビル。

ぼくらの町では見られない、最初のもの。

ちょうど昇ってきた朝日に照らされたそれは、どこまでも高くて。

「やっぱり、きてよかつたな……」

ぼつりとハルが咳く。

「あとでね、むいつでは見られないものがあるんだね…」

ぼくたちは、首が痛くなるまで、ずっと飽和すこじれから歩く町のビルを見上げていた。

第六話 事件と事件

ぼくたちは、東京を満喫していた。

初めてみる大都会。テレビに出でていた町。どれくらいいるのかわからぬほどの人たち。

駅前にいるパフォーマー、見たこともない珍しい店。見るものすべてが珍しかった。

午後一時。

ぼくたちは竹下通りの中にあるハンバーガーショップで、これから計画を立てていた。

「つぎは、あそこで服買ってあるお店に行つて…

「まだいくのかよ……」うんざりした顔のぼくに、

「いいでしょ、せっかく来たんだから」ハルが口をどがらせる。

「荷物を持つのがぼくじやなければ」できるだけ嫌そつな声で、いつてやる。

実際、さつきまではすごい荷物を抱えていた。

かわいい服だのぬいぐるみだの見つけるたびに買おうとするのはいいとして、それを全部ぼくが持たされるから、重くてしようがない。

さつき嫌がるハルを説得して宅急便で送らなきや、どうなつたことやう。

「それよりさ

ハルがしゃべるのを止めて、話を切り出す。

「ちよつとよそへいつた方がいいかもしない」

「どうして?」ちよつと頬を膨らせて、ハルが言つ。

「来る前の予定表だと、だいたいこの時間にこの町に来ることになつてゐんだ。そこで見張られてたら、またつかまつちやうよ?」

「だいじょうぶだよ。追っ手の人はまいちゃったんだし」

「だからこそ、逆にそこで見張つてゐかもしないじゃない。手が

かりはそれだけしかないんだし」

「しゅーちゃん、心配しすぎ!」

「ハルが心配しなさすぎなんだよ!」

「だつてそれじゃ、ちつともおもしろくないもん」

「おもしろいとかじゃなくてさ。捕まつちやつたら、もう遊べないんだよ?」

「い・や!」頑固にハルは首を振る。

「い出したら聞かないのはわかつてゐけど、こんな時ぐらゐ素直に聞いてくれたつていいのに!」

「嫌なのはこいつちだぞ。ハルと一緒に捕まりたくなんかないし」

「しゅーちゃんこそ、びくびくしそう! そんなんじゃ、ばれないものばれるよ!」

「ハルは考えなさすぎだー! もうちよつと注意したらいどうなんだ!」

「だんだんと、声が荒くなつていいくのがわかる。」

「だったら、わたしだけでいくもん!」

「かつてにしるー!」

もう我慢できない。トレーラーをひつつかんで、出口へと歩き出す。

店を出て、ぼくは駅へと歩き出した。ハルはそれを見て、顔を背けて反対側へとあるき出す。

一度振り返つて、ハルと目があつて。

「ふん!」

またお互に顔を背けた。

足音が、いつもよりずつと大きい。

そこにハルがいるかのように、道路を踏みつけながら歩く。

ハルのばか。

ハルのあほ。

あんなわからずや、どうなつたつて知るもんか。

だいたいあんなわがままなやつ、一緒にいるだけで疲れるよ。いなくなつてせいせいした。

ハルのことなんか忘れて、一人でのびのび遊ぼう。うん、それがいい。

自分に言い聞かせるように、頭のなかで繰り返す。

ふと立ち止まって、辺りを見回す。

知らない町。

知らない人たち。

あいかわらずの、見たことのない風景。でも、どきどきしない。おもしろくない。ただ不安になつて、いろいろするだけ。こんな知らないところに、一人でほうりだされて。あたりには頼れる人は誰もいなくて。

(……ハル、どうしてるかな)

気が付けば、そんなことを考えている。

(いいや。あんな奴の事なんて、もうどうだつていいじゃないか)
そう思つて、その考えを振り払つ。

けれど気が付くと、またハルの歩いていつた方向を見ている。

(ハル、迷子になつてないかな)

(だいじょうぶかなあ)

(あいつ、おつちょこちょいだからなあ。泣いてなきやいいけど)

そして思い出す。

ハルが、ここに行こうと誘つてくれたこと。

ハルとだから、行こうと思つたこと。

ハルと一緒に、ここまで無茶ができたこと。

やつぱり、ハルと一緒にじゃなきゃだめだ。

もと来たほうにきびすをかえす。

ハルに会おひ。会つて、あやまつて、また一緒に歩ひへ。

そつ思つて、足を踏み出したとき……

携帯が鳴り響いた。

番号を見る。ハルからだ。

急いで電話を取る。

「ハル、さつきは……」「めん、といにかけたといひで、

「しゅーちゃん、助けて！」

ハルが叫ぶのが聞こえた。

「どうした？迷子にでもなつたの？」

「ちがうよ！」

真剣な声。本当に、助けてほしこときの声。ふぞれ立つてうつむか

聞こえない。

「どうしたの？」

「なんか、変な人に追つかれられて……」

「変な人？」

「うん。なんかすく怖そうな人たちが……」

ハルの息が荒い。たぶん、追つかれられて逃げている最中なんだろう。

「今どこにいるか、わかる？」

「さつき通つたビルがあるじゃない。あのビルから奥に入つて少し
いつたところ！」

「わかつた！」

電話を切つて、走り出す。

だから言つたじゃないか、追つ手がいるから危ないつて！

でも、電話の向こうのハルにそれを言つ氣にはなれなかつた。まずはあいつを見つけて、助けてやらないと。

「ハルが一緒じゃないと、つまんないからな」

言い訳するように独り言を言つ。

人ごみをかき分けて、ハルのいる方向へ。

なんだか少しほつとした感じがするのは、たぶん氣のせいだひつ。

ハルは、しばらくして見つかった。

住宅街の間の、小さな裏路地。にぎやかな町から一歩入つただけなのに、どこにも人の気配がしない。

そこの、小さな植え込みの陰。

ハルが、何人かの男に囲まれていた。

髪を金に染めた男、赤に染めた男。それだけなら原宿には珍しくもないけど、彼らの雰囲気は、それとは全く違つていた。

（怖い……）

近寄るだけで、体かすくんでしまいそうな雰囲気。

「しゅーちゃん！」

ハルの叫び声で、向こうも気づいたらしく。ぼくの方に、目を向ける。

その目を見たとたん、背筋が寒くなつた。

違う。

こいつらは追つ手じゃない。

もつと嫌な感じがする。

けれど、ここで逃げるわけにはいかない。

ハルを助けないと。

三人の様子を見る。一番右の男をなんとかすれば、とりあえずハルは逃げられるだろう。

そう計算して、右の男に突っ込んでいく。

「ハルをいじめるなっ！」

そのとき、ハルを取り囲んでいた男達が、にやりとわらつた。

まるで、獲物をとらえたときのような、嫌な笑いだ。

……そういえば、どうしてハルは今まで無事に電話ができたんだ？

こんな状況なら、ハルなんか簡単に捕まえられるはずなのに。
どうして、ぼくがここにたどり着くまで、携帯で話ができたんだ？
あんなもの、すぐに取り上げてしまえるのに？
ぼくが来るまでほおつておいたのは……

ぼくを、おびき寄せた？

「しまつ……」

気づいたときには、遅かった。

首筋に衝撃が走った。

目の前が真っ暗になる。

ぼくが覚えているのは、そこまでだった。

第七話 誘拐

ひんやりとしたコンクリートの床の感触で目が覚めた。

天井がすいぶんと高い。真夏の日差しも、じこまでは届かないようだ。

(冷たい?)

今は真夏なのに?

なんだ?

どうなったんだ?

あの時、変な奴らに襲われて……

あわてて体を起こそうとして、失敗する。

(なんだ、これ?)

手が動かない。

何かで、縛られている?

なんとかはずそうと、手首を前後に振り、ちからこいぱい引っ張つてみる。

けれど、よほどがつちつと縛つてあつたらしくて、手首がこされるばかりでちぎれない。

何度もやるうち、手首が痛くなつてきたり。たぶんこされて、血が出てるんだ。

結局ほじくのをあきらめたぼくは、いまの状況を思い出してみた。

(そつか、やつきの……)

(……)

(ハルは?)

ぼんやりしていた頭が、一瞬で冴えた。あたりを見回す。

と、僕の後ろで、

「ううん……」と、小さな声。

「ハル、大丈夫？」

「しゅーちゃん？」

ぼんやりとしていた目に、少しづつ光が戻つてくる。

「よかつた。とりあえず、無事……」

「しゅーちゃんっ！」

ハルが飛び上がつて……ぐずれた。

手が縛つてあるから、うまく起きあがれなかつたんだ。

「だ、だいじょうぶ？」

あわてて声をかける。

なんとか起きあがると、ハルはいきなりぼくに飛びついてきた。

「ハル？」

「よかつた……無事だつたんだ……」

それだけを、何度も何度も繰り返す。

「心配したんだよ、しゅーちゃん……」

泣き続けるハルを、なぐさめてやりたかつた。

けれど、手は縛られていて、いつもみたいに背中をなでてやることもできない。

だから、肩を貸した。

ハルの目の前に、肩を突き出す。

ハルはおとなしく、ぼくの肩に顔を預けて、なきじやくつた。

肩は冷たかつたけど、伝わってくるハルの暖かさが、いまは誇らしかつた。

しづかにして遙が落ち着くと、ぼくたちはあらためてあたりを見回した。

「どこなんだろ、ここ……」

「なんかの倉庫みたいだね

いくつもの棚が並んでいて、そことの間の床に、ぼくたちがされていた。

あたりには、荷物がうずたかく積まれている。

「今でも使つてゐるのかな、この倉庫」

「かもしないね。クーラーも利いてるみたいだし。もしクーラーがなかつたら、暑くていられないはずだよ」

真夏の光も、ここまでは届かない。窓のない倉庫の隅っこは、この時間でも薄暗くて。向こう側に何か得体の知れないものがいそうな、そんな感じがして、ぼくは身震いした。

ふと、ハルの手元を見る。

縛られた両手。ぼくと同じでなんとかはずそつとしたんだろう、手首に真っ赤なあざができる。いる。

縛っているのは、ビニールのひもだ。それで、何重にもぐるぐる巻きにされている。

力づくでは、はずせそうもない。

「これは、どうにもできないね」「ぼくの言葉に、ハルもつなづく。

「これ、追つ手の人たちじゃないよね」ハルが、ぽつりと言つた。

「そうだろ?」

追つ手の人たちだったら、そもそもぼくたちを殴つたり、氣を失わせたり、こんなところに閉じこめたりするはずがない。

「そうすると……」

さつきから、考へていたこと。もし口に出したらそれが本当のことになつてしまいそうで、怖くて口に出せなかつたこと。

「誘拐……?」

その言葉に、ハルが身をすくませる。

「そんな……」

「でも、他に考へられないよ。じやなきや、どうして縛られてこん

などいろいろ転がされてるのや」

そのとき、外で足音が聞こえた。
びくつと体が震える。

乱暴にドアがを開けてあらわれたのは、ヤツキの男達だ。

「やつとお目覚めか」縛られたぼくたちを見て、にやにや笑つている。

ハルが、体をすくめる。

男達が手が出せないよつて、なんとかからだを動かして、ハルの前に動いていく。

「へえ……」

それに気づいて、金髪の男がさらりと笑う。

「ナイトのつもりだぜ。ガキのくせしてよ」

「こつた、どうして……」男の言葉を無視して、聞いてみる。

「はつ」赤い髪の男が、馬鹿にしたように咳く。

「ずいぶん頭の悪いガキだな。誘拐されたに決まってるだろつが」

誘拐……

一番信じたくなかった言葉。

「どうして、こんな……」

「どうしてか? そりや、田の前にこんな獲物がのこな歩いてたら、捕まえるに決まってるじやねえか」

鼻ピアスの男がせせら笑つた。

「ここはどこ?」

ぼくの質問に、彼らは歯をむき出して笑う。たぶん、まともに答える気はないらしい。

いや、そもそも質問に答える気もないのかもしね。ただ僕らを痛めつけて、笑うためだけに来たんだろう。

「おうちにかえしてよー」

ハルが叫ぶ。

「家出中じやなかつたのか？」

男の言葉に、ハルはぐつと詰まつた。

「これは、他のことを聞いても笑われるだけで終わりそうだ。だから、一番大事なことだけ聞いてみた。

「これから、どうなるの？」

一番、聞きたかったこと。

「おまえらが、親に愛されてるかどうかだな」

いやな言い方だ。

「おまえらの親が金を払つてくれたら、きちんと解放してやる。それは心配するな」

リーダーらしい鼻にピアスをした男が言ひ。

「もし、お金を払つてもらえなかつたら……おわるおわる、たずねる。

「そりだな、そのときは……」

男が、ナイフを取り出して、

「きやーーーつ！」

ハルの悲鳴が聞こえた。

男のナイフは、ハルの皿の前一センチぐらゐのところへ、止められていた。

「何すんだ！」

自分の声が裏返つているのがわかる。

ハルはぎゅつと皿をつぶつて、ぶるぶると震えている。

それを見て、男は満足そうに笑つた。

「生きて返せば、耳や指のひとつぐらいなくなつても、特に困る」

とはないからな

そういうて、ゆつくりとナイフをしまつ。

「もちろん、要求通り金を払わなかつたときは……」

そう言って、首をかぎ切るまねをして、男はまた笑った。ぼくたちを痛めつけるための、笑いだった。

けれど、ぼくはそんなことはどうでも良かった。

後ろで震えるハルが心配で。

震えているハルに、少しでも体をくっつけて。

少しでもハルのふるえが収まるように、それだけを考えていた。

男達は、僕らの様子を見て満足したらしい。

「逃げようなんて気を起こすんじゃないぞ」

それだけ言つと、男達は去つていった。

ドアの閉まる音が、大きく、大きく響いた。

第八話 やくそく

あいつらが出ていつてからも、遙はずっと震え続けている。

ぶるぶると震えているハルを安心させるために、できるだけ体をくつつける。

ぼくはここにいるよと、ハルに伝えたくて。

ぼくの肩に顔を埋めて、ハルが泣いてる。

「しゅーちゃん……怖かった！怖かったよ……」

こんなに怖がってるハルを見るのは、はじめてだ。

なんとかしてあげたい。

でも、いまのぼくには、泣いてるハルを慰めてやることもできない。

「大丈夫だよ」といつて、背中をなでてやることもできない。

いまこの手が動くなら。泣いてるハルを慰めてやれるなら。

ぼくはなんだつてするのに。

「だいじょうぶだよ。泣くなよ、ハル……」

それだけを、繰り返し言い続ける。

そんなんじやハルが泣きやまない」とぐりい、わかっているのに。

でも、いまのぼくにできることは、これだけだから。

だから、なぐさめながら、そばにいる。

あいつら。ハルをこんな目に遭わせて。

絶対、許さない。

絶対に。

けれど……

あいつら、どうして僕らを誘拐したんだ？

そうして、ぼくは考えて。

気が付いた。

気が付きたくなんかなかつたこと。」。

体が震える。

今、震えちゃだめだ。

ハルが震えるのに、ぼくまで不安になつたら。
けれど、ふるえは止まらない。

いまとなつて、いるハルに、たすけてもらいたい。
寒氣がする。いまは夏で、ここはこんなに暑いのに。

「しょーちゃん、どうしたの？」

とつとう、ハルに気づかれた。

「なんでもないよ」

「うそー、しょーちゃん、真つ青だよー。」

「ほんとこ、なんでもないって！」

気づかれちゃだめだ。

いまのハルに、こんな事を教えた。

ハルが、壊れちゃう。

「……しょーちゃんも、なんにもいってくれないの？」

なんにも知らないハルが、泣きながら言つ。

「おとーさんやおじさんたちみたいに、なんにもいわずにわたしだけのけものにするの？」

言えない。それでも、言えない。

父さんたちが、なんでぼくたちを止めたのかはわからないけれど。
言えない理由は、よくわかる。

でも……

(「のまま話さなくても、ハルは壊れりやうとじやないか？」)

(こんな事を隠していることがわかつたら、もう一度とハルは口を利いてくれなくなるんじやないか?)

目の前のハルは、すっかり元気をなくしてゐる。

こんなのは、ハルじゃない。

言つても言わなくても、ハルが泣くのなら。

ぼくたちがどんなことになつてゐるのか知つてから泣く方が、まだいいはずだ。

いつものハルなら、そう思ひはず。

「しゅーちゃん?」

ようすが変わつたのが、わかつたらしい。ハルが、すこし不思議そ
うな声を出した。

「ハル……落ち着いて、よく聞いて」

まだしゃくりあげながら、ハルがうなずく。

「なあ、ハル。ぼくたちが東京に行く」と、誰かに言つた?」さ

つきから、ずっと氣になつていていたこと。

「ううん。行けるかどうかわからなかつたし、夏休みだからあんまり友達に会わないし」

「だよね。ぼくも、言つてない」

「それがどうかしたの?」不思議そうなハルに、説明する。

「ハルも言つてない。ぼくも言つてない。じゃ、いつたいどうじて、あいつらはぼくたちがここにいることを知つてたの?」

また、震えが来た。

「僕らを誘拐しようとするなら、絶対にぼくらの町でするはずだよ。といつより、他の場所で誘拐なんてできるわけがないよ。

それなのに、あいつらはわざわざ東京で僕らを誘拐した。しかも、予定表通りの場所でね。

とすると…あいつらはぼくたちが東京に来る」と、この時間に原宿にいることも、全部知つてたことになる。「

「だれか、わたしたちの予定を知つてゐるひとが、あいつらにその予定を教えたつてこと?」

「いや……教えたんじゃない。ぼくたちの旅行の予定なんか聞いたら、疑われるに決まつてゐる。普通、なんの関係もない人にそんなことを教えないよ。」

あいつらの様子を見る限り、親戚の誰かと仲がいいつて言つ」ともなさそうだ。とすると、

……ぼくたちの予定を知つてゐる人が、あいつらと手を組んだんだ。そして、予定を教えて、誘拐をさせる」いやだ。そんなこといやだ。信じたくない。でも……

「誰か、裏切り者がいるんだ。それも、予定を手に入れることができ、ぼくたちに近い人が。ぼくたちを誘拐して、こんな目にあわせた誰かが」

話し終わると、倉庫の中は静かになつた。

とても、静かになつた。

ハルは黙つたまま、なにも言わない。

さつきよりも、もつと元気をなくしたのが、わかる。言わなきやよかつた。

たとえハルに恨まれても、ずっとじぶんだけの秘密にしておけばよかつた。

でも……

それは、できない。

それじゃ、お父さん達と一緒になつちやう。

ぼくたちが知らないところで、勝手に物事が進んでくのなんか、ぜつたいいやだ。

だから、それはいい。

それよりも、ハルをなぐさめたい。
なんとか、ハルに元気になつてほしい。
いつものハルの顔が見たい。

「ハル」

しおれているハルに、背中越しに声をかける。

「どんなことがあつても、ハルは逃がすから。何かあつたら、ハル
だけでも逃げて」

ハルを元気づけるつもりで言つた言葉だつたけど、ハルは首を横に
振つた。強く、強く。

「やだ！」大きな声で、ハルは叫んだ。

「ハル？」

「しゅーちゃんといつしょじやなきや、やだ！」

ハルは、目に涙をいつぱいためて、ぼくをにらんでいる。
本当に怒つたとき、ハルがいつもする顔。

「だつてさ、もし私がだけ逃げたとしたら、わたし、しゅーちゃん見
捨てたことになつちゃうんだよ？そんなのやだよ。わたし、しゅー
ちゃんといつしょじやなきや、絶対逃げないからね！」
わすれてた。ハルはこうこうやつだつた。

「逃げるときは一緒だよ」

「…」めん、ハル

「あやまんなくともいいから、やくそくしてよ。絶対に、一人で逃
げるつて」

「やくそくする。やくそくするよ、ハル

そういうと、ハルの顔がちょっとだけ明るくなつた。

「じゃ、ゆびきつ」

「ゆびきつ？」

「約束なんでしょう?」

そういうて、ハルの小指が伸びてきた。
背中合わせに、縛られたハルの小指になんとか指を絡める。
ゆびさりをして、小指を離す。

「うそそしたら針千本だよ?」

そう言ったハルの顔に、さつきまでの、消えてしまいそうな感じは
なかつた。

いつもの、元氣でおてんぱで無鉄砲で考え方のハルだった。

「ハル……」

「ん?」

「いっしょだよ。どんなときでも

絶対、逃げてやる。

あんな奴らに、一円だつてやるもんか。

ハルと二人で、絶対逃げる。

そのためこ、今はゆつくつ休んでおこい。

いざとこうとき、ハルと一緒に逃げられるよう

……ハルとこれからも、一緒にいられるよう

第九話 空が飛べないのなら

「……だめだー」

何度目かの挑戦で、ぼくは床にひっくり返った。となりには、やっぱりひっくり返ったハルの顔。

あれから、なんとか動く指先で、ハルの縄を解こうとしたけれど。大人の力できつく縛られた縄は、びくともしなかった。

「指じゃ無理だよ、これ……」

ハルの声に、ぼくもうなづく。

「なにか刃物がないと、どうにもできないよ」

刃物といつても、あたりは段ボール箱ばかりで、それらしいものなんか見つからない。

「しばらく待つしかないか……」

そういうて、あおむけになる。

うんと上方に、高い天井。

明かり取りの窓は、ハルとぼくを合わせたよりも、ずっと遠くて。たとえ縄が解けたとしても、そこまでは登れない。

(ほんとだつたら)

いまさらはあの窓の外で、まだ楽しく遊んでたはずなのに。じつさいは、ぼくらはこんな倉庫の片隅で縛られて転がされて。いつ出られるかも、どうなつてしまふかもわからない。

もしも空が飛べたなら。あの窓から出ることができたら。なんだが、すこし涙が出てきた。

なんとかこらえて、ハルの方を見る。

いまのが気づかれてなかつたか、ちょっと心配だったから。

けれど、となりのハルのようすは、なんだかおかしかった。

息が荒い。少し顔が赤くなってる。

熱を出しかけの時、ハルはいつもこんな感じになる。

「ハル、だいじょ「べふ？」あわてて聞いてみる。

「うん。ちょっとのどがかわいて……」少し苦しそうな声で、ハルが答える。

そういえば、やつ毛お店でジュースを飲んでから、ずっと何も飲んでない。

あんなに暑い中を走り回ったのに。

（もつと早く気づいてやれば良かったかな）

「あいつら、お水持つてくれるようになんてみるよ」

そつ毛の手を、ハルがつかんだ。

「いやだよ、こわいから」

やつ毛のことを思い出したんだろう。ハルの体がまた震えてる。

「……でもさ。僕らがお水を飲みに行けるわけないじゃない。ちょっとお水を持つてきてもらうだけなら、なにもされないよ、たぶん。それにさ、逃げ出すとき、体調が悪かったら、すぐに捕まっちゃうよ。いまはゆっくり休んで、チャンスを待つ方がいい」

ぼくの言葉に、ハルは小さく、じっくりとつなづいた。

ハルにはああいつたけれど、やつ毛に怖いことが頭いっぱいになる。

それでも、なんとか呼びかけてみる。

「すいません」

ドアの向こうからは、なにも返事がない。

「すいません！」

ちょっと大きな声で叫ぶ。それでも、返事はない。

「すいません！」

思いつきり大きな声で叫び、どたどたと足を踏みならす。やつぱり、返事は返つてこない。

それでも何度も大声を上げていると、やがて足音が下から聞こえてきた。どうやら、階段を上ってきたみたいだ。

足音はドアの前で止まり、

「「つるせえな……」

金髪の男が、不機嫌そうな顔で現れた。

「なんだよ」

思い切りにらまれて、体がすくむ。

「お水が飲みたいんですけど。ハルの具合が悪いみたいだし」

「そんなことでいちいち呼ぶなよ」うんざりしたような感じで言い捨てて、男はそのまま帰ろうとした。

「けど、ぼくたちは手も足も縛られてるからお水を飲みに行けないし。それにもしハルが病気になつたりしたら、そっちもいろいろしなきやいけないでしょ？」

ぼくの言葉に、男は立ち止まって、物凄く不機嫌そうな顔をした。

「よけいなことを言つな」

しまつた。ちょっととまづい言い方だつたかもしない。

けれど、男はそこでじつと考えてている。ぼくの言葉は男を動かしたらしい。

やがて、「……ちょっと待つてろ」といふと、男は外へと出ていった。

少しして、男が水の入ったガラスのコップを一つもつて戻ってきた。

「感謝しろよ、わざわざ持ってきてやつたんだから」

いかにも良い」とをしてやつたと言いたそうな男に、とりあえずお礼を言つ。

「ありがとうございます」

まず、男がハルに水を飲ませる。

ハルはのどを鳴らして水を飲んでいく。

飲んでいくうちに、ハルがすこしづつ具合が良くなつていいくのがわかる。

飲み終わったときには、さつきよりもうんと元気になつたハルが、ぼくの方を見て笑つた。

少しほつとした。

次は、ぼくの番。

男が、水をぼくの口に流し込む。

でも、

(……速い！)

水を流し込むのが早すぎた。

我慢できなくなつて、むせてしまつた。

はずみでコップが床に落ち、割れて飛び散る。

「なにしやがる！」

男がいきなりぼくの頭を叩いた。

頭がくらくらして、何も考えられなくなる。

「なにするの！」

ハルが男をにらみつける。

けれど男はハルの方なんか見向きもせずに、汚れてしまつた自分の服のことばかり気にしている。

男はあわてて飛び出していき、しばらくしてからちりとつとぼうきを持って、戻ってきた。

ぶつぶつといながら、割れたコップを片づけていく。

倒れているぼくと、男をにらんでいるハルには、見向きもしない。

たぶん本当に、気にしてなんかいない。

ぼくらに何かできるなんて、考えてもいないから。

だから、簡単に水を持つてきてくれたし、この部屋にいてぼくたちを見張つてもいなかつた。

彼らにとつて、ぼくらはなにもできない、彼らの気分次第でどうとでもできるただの子供でしかない。

なぐられたことよりも、そのことのほうが悔しかつた。

片づけが終わると、まだふつぶつ言にながら、男はやつと帰つていった。

男がいなくなると、すぐにハルが飛びついてきた。

「だいじょうぶ?」

倒れ込んだぼくを、ハルが心配そうに見つめる。

正直、すごく痛い。けれどハルを安心させるために、なんとか笑顔を作ること。

「だいじょうぶだつて。それより、いまは考えることの方が大切だよ。いまので、いろいろとわかつたし」

そう言って、なるべく自信ありげな顔を作る。

「わかつたつて……なにが?」

きょとんとしたハルに、ぼくはゆっくりと説明をはじめた。

「まず、あれだけ大きな声を出して叫ばないと、向こうには聞こえないって事。つまりこの部屋には見張りがいなくて、どこか離れたところにあいつらがいること。

それから、ここでどんなことを話しても、あいつらまでは届かない。だから、あいつらに聞かれずに、いろんな事が相談できること。もうひとつ、あいつが来るとき、下の方からだんだん音が大きくなつてきたでしょ? たぶんここは上の階にあつて、あいつらはすぐ下の階にいること。いちおつ暴れたら聞こえたんだから、何階も離れてるわけがないからね」

話しへこへづかに、ハルの田^たがどんどん大きくなつていぐ。
せつとひびくつしてゐるな。

ちょっと氣分がいい。

けれど、こんなもんじやなによ、ハル。

空が飛べないのを泣いてても、しうがないから。
空が飛べないのなら、飛べるよつにすればいいんだ。

「それから、そこ」にね……」

おもこつせつ氣を持たせるよつに闇を空けて、縛られた手の下を見
せる。

つられてのせき込んだハルの田^たがまんまるになつた。
手の下には、せきのロップのちつちやな破片が転がつていた。

そつとドアを開ける。

あいつら元気づかれないよう注意しながら、ひょっとだけ顔を覗かせる。

その下に、もう一つ。ハルの小さな頭。

「だいじょうぶ?」

「うん。だれもいないみたいだよ」

その声で、ハルが小さく息をつく。

ドアの前には廊下があつて、卒業式の時体育館に敷くよつた緑色のシートが、階段まで続いている。

「どこにいるんだろ、あいつら……」

「しゅーちゃん、あそこ」

ハルが指さした先。目の前の、手すりの付いた広い階段の下に、何人かの男達が集まっていた。

あいつらを何とかしないと、とても逃げ出せそうにない。

さらにその向こうにも、下への階段が延びているから、ここはひとつや二二階より上らしく。

「……窓とかから逃げるわけにも行かないか」

だいたい、あんな窓に登るだけでも大変だ。

やっぱり、あいつらをどうにかしなきゃいけないらしい。

それが終わると、ぼくたちは改めてこの倉庫の中を見回した。

あたりをすりと埋め尽くす、段ボールの箱の山。

適当に一つ開けてみる。

「ひつやいいや。ちよつといい武器になる」

紙のパイプだ。組み合わせて棚なんか作つたりするやつ。

一本取り出して、ハルに一つ渡す。

けど受け取ったハルは、なんとなく不満そうだ。

「ここなんじや、やつつけられないよ。もつとじゅうぶんなのない?」

「……死んじやつたらどうするんだよ」

あきれで、ハルを見る。

「何とか、あいつらをやつつける方法、ないかなー」僕のようすは
気にもしないで、ハルがつぶやいた。

「別にやつつけなくとも、あいつらがいなくなつて、ぼくらが逃げ
出せればいいんだよ?」

なんだか忘れてるような気がしたから、言つてみる。

「やだ、そんのーだつてあいつら、しょーちゃん殴つたんだよ?
仕返しごらいしなくちやー!」

ハルの声は小さかつたけど、すこく厳しい声だつた。

こういつとき、ハルに何を言つても無駄だ。

それに、確かに逃げるだけじゃ腹の虫がおさまらない。
さつき思つたじやないか、絶対許さないつて。
なんとか、あいつらをやつつける方法は……

「鉄パイプか何か、ない?」

考へている僕に、ハルがいきなりそんなことを言つた。

「……そんなので殴つたら、あいつら死んじやうよ」

「べつに死んでもいいけど、しょーちゃんも捕まつちやつでしょ?」

「そうじやなくてね……」

いたずらっぽくハルが笑う。この旅行のことを言つだしたとれど、
同じ笑い方。

何か、とんでもない」とを思いついた顔だ。

「なんか思いついたる、ハル」

「あのね……」

耳元で、ひそひそ話された、その計画は。

たぶん、僕がいくら考へても思いつかない、すうじい計画だった。

「……いいね、それ！ いただき！」

思わず、ハルを抱きしめる。

「すうじいよ、ハル！」

「さつきから、しゅーちゃんばつかりがんばつててさ。わたしだって、このくらいのこじとできるもん

ちょっと赤い顔で、ハルが言つた。

ハルの計画がうまくいくように、部屋の中を探す。

鉄パイプはなかつたけど、大きな台車が見つかった。

たぶんこれで荷物を運ぶんだ。

動かしたらすごい音がしたから、それぞれ持つて運んだ。

あいつらに見つからないように慎重に動いて、5分くらいで準備ができた。

「これで、十分かな」

僕の声に、楽しそうな顔で、ハルが言つ。

「反撃開始だね」

「いつまでもやられっぱなしじゃないよ」

お互に顔を見合わせて、にやつと笑う。

正直、怖いのはあるけれど。

この顔のハルがとなりにいれば、どんなことだつてできるよつた気がする。

ハルがどう思つてゐかは知らないけれど。

はじめる前に、もう一度だけハルの顔を見る。

ハルはちょっと不思議そうな顔をして、それからまた楽しそうに笑つた。

わざと大きな音を立てるよつこ、台車を階段の前に運んでいく。階段の下のあいつらが上を向き、ぼくらの姿を見て、一瞬だけ信じられないような顔をした。

一瞬だけだった。

すぐに、ものすごい顔になつて、階段を駆け上がりつてくる。階段の前の見張りは、誰もいなくなつた。

あいつらが一番上まで、一、二段まで来た、そのとき一度だけ、ハルと顔を見合わせて。

「1、2の、3！」

一気に、皿の前のシートを引き上げた。

シートが、階段の下まで、まっすぐにのびる。上にあつたものを、何もかもはねとばして。

金髪の男が、空中を駆け上garのを、ぼくは確かに見た。そしてその格好のまま、空中をまつさかわまに転げ落ちていいく。ほかの男達が、その上にどんどんと積み重なつていいく。

階段の下は、あつという間に倒れた人でいっぱいになつた。

そこに、やつ持つてきだんボール箱を台車ごとぶちまける。さつき、鉄パイプを使おうとハルが言つていたのは、これだつた。重すぎる段ボールを、早くぶちまけるため、ここにするつもりだつたんだ。

中身の紙管が、ものすごい勢いで転がつていき、倒れた男達を埋めた。

「……死んでないよね？」
「……だといいけど……」
ハルと、顔を見合わせる。
階段の下では、物音一つしない。

紙管の間から、ちゅうちゅうと顔や足がはみ出している。

けど、すぐにハルが手すりに飛び乗った。

そのまますべりおり、飛び降りる。

ハルの足の下には、さつき埋まつた真つ赤な髪の男。かえるがつぶれたような声を上げて、男は気を失つた。

「だいじょうぶみたいだよ、しゅーちゃん！」

「……いや、だいじょうぶじゃないだろ……」

……これからは、絶対にハルを怒らせなこよつこよつ。

ぼくもすぐに滑り降りる。

ハルのまねをして、途中でうめいていた金髪の男を、思いつきり蹴り飛ばしておいてから、入り口の向こうのハルについて走り出した。

「急いで！」ハルの声について、階段を駆け下り、入り口を一気に目指す。

一階の入り口はもうすぐだ。

けど……

「！」

声にならない悲鳴を上げて、ハルが立ち止まる。

入り口の前には、まだ何人かがいて、ぼくたちを待ちかまえていた。

「あいつらだけじゃ、なかつたんだ……」

声が震えるのがわかる。

後ろからも、さつきつぶれた男達がやってきた。

前の男達はにやにや笑いながら、後ろの男達は今にもつかみかからうな顔で、じつちに迫つてくる。

「ハル、後ろ頼む」

「うん」

背中を合わせて、持つていた紙管を構える。

背中の向こうに、ハルがいるのがわかる。
怖いのが、少しどこかにいった。

「絶対、逃げるからね」

ハルにだけ聞こえるように、小さくつぶやいて。
背中ごしに、ハルが少しだけ安心したのを確認して。
ぼくは、男達をにらみつけた。

第十一話 救援

そのとき、入り口のドアが開いた。

男達がいつせいにそちらを見る。

入ってきたのは、30歳くらいの落ち着いた感じの男の人だった。

彼を見て、男達の顔が一瞬ゆるむ。

「やあ、こりや……」

笑つて言いかけた男の一人に、彼はいきなり猛烈なパンチを浴びせる。

「！」

あわてて男達が彼を取り押さえようとしたけれど、彼の方が早かつた。

一分もしないうちに、あいつらは全員床に転がっていた。

あいつと喧嘩間にあいつらを片づけると、男はぼくたちの方に近づいてきた。

身構えるぼくたちの前で、男はにっこり笑つて、

「お待たせしました、周哉様に遙様。平沢と申します。高月の家の方から助けに参りました」

といつて、頭を下げた。

あわててこっちも頭を下げる。

「助けに来てくれたの？」

嬉しそうな顔をするハル。

「ええ。遅くなつて申し訳ありませんでした」

そう言つて、すまなさそうに頭を下げる平沢さん。

「とんでもない！……ハルを助けてくれて、ありがとうございます」

……正直に言つと、ちょっとだけおもしろくなかった。

自分たちだけで逃げ出しことができるなかつたから。

でも、平沢さんが来てくれなかつたら、どうなつてたかわからない。
たぶんまた捕まつて、もつとひどい田にあつてただろ。ハルが無事だつたんだから、いいぢやないか。

……いつ思つひことにした。

「じゅあ、早く逃げましょ。」

ぼくの顔に、平沢さんがあたりを見回す。

「やう言えば、荷物はどうされました？」

思わずハルと顔を見合わせる。

「すつかり忘れてたね」

「あいつらにとられちやつて……」

「じゃあ、ついでに取り返してきましょ。」

すぐには荷物は見つかつた。鮭魚つて帰らひつとすむべくたぢに、平沢さんが言つ。

「大事なものはだいじょぶですか？」

「だいじなもの？」

「ええ。いちばん大事な、なくしたらこまるものですね」

なくしたらこまるもの、とこうと……

ひとつしか、思いつかなかつた。

右脇にいたハルの肩やほっぺたを、ぺたぺたと触つてみる。

「……なにしてゐる、しゅーちゃん？」

きょとんとしているハルを見ながら、平沢さんに言つ。

「だいじょぶです。なくなつてしません」

平沢さんが、不思議そつな顔をしている。

……なんかおかしかつたのかな？

もう一度、となりのハルを見直す。

……ちゅうと、顔赤いかな？

「具合悪いの、ハル？」

「え、ううと、べつに……」

そう言つハルのおでこに、おでこをくつつけた。

「熱はないみたいだけど」

顔を離すと、さつきより赤くなつたハルの顔。

「ハル、ほんとどうしたの？さつきより、もつとひどいよー。」

「いいから！」

そう言つて、ハルは横を向いてしまつた。

「……いや、そういうとじやなくてですね」

平沢さんが苦笑いする。

「何か、大事な荷物を取られてはいませんか？」

平沢さんの言葉に、あわててカバンの中を探してみる。

「携帯は？」「あるよ」「証明書は？」「だいじょうぶ」「お金は

?」「うん、ちゃんとある」

「」の服、お気に入りだつたんだよ。よかつた、とられてなくて

「うん。カメラも服も、みんなある」

ぼくたちの答えに、平沢さんは納得しなかつた。

「ほかに、なにがあるでしょう」

「もうほかに、大事なものつてあつたかな？」

ぼくの言葉に、ハルも首を傾げる。

「なんにもない」と思つた

けれど、平沢さんは首を振る。

「そんなことはないでしょ。何か、おじいさまにもりこませんで
したか？」

「おじいちゃんに？」

「……おでがみ、かなあ？」自信なさそり、ハルが言つた。

「そつか。それがあつたね」

「手紙？」

「ええ。おじいちゃんに頼まれて、とじけてほじって」

「……どんなものか、見せてもらえますか？」

平沢さんのことばに、ハルがバッグの奥から手紙を出した。

「これです」

ハルの手に握られた小さな封筒に、平沢さんが手を伸ばす。

「大事なものでしょから、預かりますよ」

その手から、ハルが手紙を隠す。

「だめだよ。おじーちゃんのラブレターなんだから。ほかのひとに渡しちゃ、だめなんだよ」

「……しかし……」

あきらめきれないみたいで、平沢さんは手紙にまだ手をのばす。

……なんだか、おかしい。

「すいません、平沢さん。ちょっと……」

「なんでしょう？」

「ちょっと、うちに電話してもいいですか？」

その言葉に、平沢さんは少し顔をしかめた。

「あとにしてください。今はそれより逃げた方が……」

そういうて、またハルのほうに手を伸ばす。

……うん。絶対に、おかしい。

そうだよ。なんでこんなことに、気づかなかつたんだろ？

もつぼくは、迷わなかつた。

平沢さんの視線の先にある手紙を、ぼくはハルの手からもぎ取つて、ハルのバッグの中に入れ直す。

「ぼくらが持つていきますから、大丈夫です」

そういうて、ハルの手を引き、外へと向かう。

「すこませんが、帰らせてもらこまか」

と、平沢さんがぼくらの行く手にさづげなく回り込んだ。
「わいこうわけにはこきませんよ。一緒につれて帰らなこと、こち
らが怒られまわし」

「しゅーちやん、いつたいてじつたの？」

不思議そつな顔のハルに、ぼくは聞く。

「……どひつて、こんなところに助けのひとがこらの？」

「……どひつこと？」

頭から？マークをとばしているハルに、質問する。

「……ハル。ぼくらは何に乗つてきた？」

「なつて、夜行列車……」

「だよね。ひとばんかけて、ゆつくりがたがたゆられてきたんだ」

「それがどうしたの？」

「ハル。ぼくたちが誘拐されてから、何時間経つた？」

ぼくの言葉に、ハルが時計を見る。

「今四時だから、一時間ぐらいだと想つ。それがどうしたの？」

「……父さんもおじさんもおじいちゃんも、今あの町にいるんだよ
？たつた一時間か二時間でここをつきとめて、助けに来ることなん
ができるわけないじやない。こまじか、連絡があつたとしたらこつ
ちに向かつてる最中だと思つよ」

「べつにおとーさん達が来たわけじゃないでしょ？」

「でもむ。ぼくたちを助け出す、なんてことは、よつほど信用ので
きる人にしか頼まないんじやないかな？じやなきや警察か。警察に
頼んだのなら警察が来るはずだし、それ以外の、例えば探偵さんと
かに頼むのなら、とりあえず状況とかを探す人に直接説明しなきや
いけないから、一度会わなきやいけないと想つんだ。そんな時間は
ないと想つよ」

「緊急事態だから、地元の人から東京での信用できる人を紹介してもらつて、とりあえず動いてもらつたんじゃ……」

「それでも、ここに放り込まれてからほんのちょっとしかたつてい。頼むにしても、それからたつたの一時間で、ぼくたちがどこで誘拐されたか調べて、どこに捕まつているか突き止めて、しかも助け出す。そんなこと、できるものなの？」

「ぼくの疑問に、平沢さんは答えない。

「それに、こいつときは真つ先におとーさん達に連絡すると思つんだ。別に、電話一本ですむことだし。けれど、それをしなかつた。なんだか嫌そうな顔して、おじいちゃんの手紙のことばっかり」

「大事な手紙を預けてあるから、なくなつていいかどうか確かめてくれと、頼されましたので……」

「嘘だ！」

自分でびっくりするような、強い声が出た。

「嘘じやないですよ。ちゃんと頼されました……」

「誰に？」

「誰に……って？」首を傾げるハル。

「さつき、こいつたよね。誰か、裏切り者がいるつて。おじいちゃん達に頼まれたのなら、ちゃんと連絡を入れるはずだよ。それに、そんな手紙よりもぼくたちの無事を知らせて、安全なところまで逃がすほうが大事だと考へるはず。間違つても、連絡より手紙を気にかけるようなことはしない。

……この手紙がほしいひとがいるんだね。ぼくたちの『安全よりも』

そしてぼくはハルを背中の後ろに隠して、いちばん大事なことを

聞いた。

「……おじさん、誰？」

答えが来ないことは、わかつていたけれど。

第十一話 大迷惑

平沢さんは、答えなこまま、ゆっくりと近づいてくる。
さつきまでの、優しそうな顔じゃない。

あいつらと同じ顔。

自分の目的のためなら何でもする、と、顔に書いてある。
いやな顔。

ハルを後ろに隠したまま、ゆっくりとせがつていぐ。
壁際に追いつめられた。

平沢さんの手が伸びてくる。

体の後ろに手紙を隠したと……

急に平沢さんが頭を抱えた。

彼の後ろには、棒を構えた金髪の男。
さつき殴り倒された男達が、反撃に出たんだ。
不意を付かれて、男はよろめく。

そのすきを、ぼくは見逃さなかつた。

黙つて強くハルの手を引く。

男達がやりあつてゐるすきに、そおひとせおつヒドアによつて。
音を立てずにいちもくさん。

大きく開いた入り口から外に出る。

薄暗い倉庫から急に明ることいに由たから、目がくらんだ。

後ろのハルを確認して。

ちよつとだけ胸をなで下ろす。

さつきまで捕まつていた倉庫を振り返る。

倉庫には、「高月製紙」とだけ書かれていた。

あたりを見渡して、人のいなそな方向に歩き出す。

と、ハルに腕をひかれた。

「ど、じ、いくの、しゅーちゃん？」

「あ、ち。ひとのいなほ、」

ぼくの返事に、ハルは思い切り顔をしかめた。

「……だめだよ、しゅーちゃん。そんなんじや、つかまつちゅうよ！」

「じゃあどうするんだよ？」ちょっとだけむつとしたのが、声に出た。

けれど、ハルは気にしない。

「わたしにまかせて！」

さつきのハルの顔。何か考えがあるときの、あの笑顔。

「ちゃんと、ついてきてね！」

そういうと、ハルは走り出す。

さつきとは反対側。つきあたりには、人でいっぱいの大通り。

「ハル、そつちは……」

「なるべく、ひとのおおいほうににげるの！」

「そんなどしたら、見つかっちゃうよ！」

「ひとのいなほうに逃げてもおなじだよ。とにかく、ついてきて！」

「でも……」

反対しようとしたぼくの耳に、後ろからいくつもの足音。

どうやら、あいつらが気づいたらしい。

迷うのはあとだ。とりあえず、ハルについて走り出す。

「しゅーちゃん！」

びっくりするくらいの声で、ハルが叫ぶ。

「なるべく、おつきなこえでさけんで！」

「そんなどしたら、ぼくらの居場所わかつちゅうよー。」

「だいじょうぶだから。」

自信たっぷりのハル。こんな時は、何をいっても無駄だ。

……それに、たいていはうまくいく。

「『助けて!』ってさげぶの?」だからぼくはあきらめて、これからどうするかハルに聞いた。

「もつとダメだよ! そんな」としたら、私たち、助けられちゃうよ?」

……そつか。忘れてたけど、ぼくたちは家出中だった。

いつかは見つかるにしても、警察に捕まつてお説教されるのはいやだった。

「それ以外なら何でもいいから、とにかくおつきなこえで!」

「こんなふうに?」

そこらじゅうにひびきわたるよくな声で、ぼくが返す。

「そう、それでいいの!」

ハルが嬉しそうに笑う。

「どうせみつかるんだったら、おもいつきり大騒ぎしちゃうんだよー!」

「そんなこと……」

納得できないぼく、ハルが振り向いて、笑う。何かいたずらを仕掛けたときの、自信たっぷりで、これから何が起きるかにわくわくしてくる、あの顔。

「しゅーちゃん。追つかれられてるのは、あいつら、それとも私たち?」

「……ぼくたち」

「小学生一人をおおせいの大人が追つかけるの。ぱっと見て、わるものどうち?」

「むいづ」

「だったら、だいじょうぶ。きっとみんなが、あの入達を止めてく

れるよ！」

そう言つて、ハルは大通りの中へと飛び込んだ。
あわてて、ぼくも追つかける。
離れないように、しつかりと手をつないで。

はじめての街の中。

どこからこんなに人がきたのかしらないけれど、ぼくらの町では見たこともないほどの人。

その中を、走る、ぐぐる、飛び越える。

カツプルの間をすり抜け、ガードレールを飛び越え、人波をくぐり抜ける。

そのたびにあつちこつちで声がするし、ぼくらは大きな声でしゃべつてゐるから、居場所はすぐにわかるはず。

けれど男達は、ぼくたちのほうに近づけない。

人波にじやまされて、だんだんと離されていく。

悲鳴と怒鳴り声。それで、向こうの位置はこつちにもわかつてしまふ。

……そつか。

だからハルは、町中に飛び込んだんだ。

人のいないところなら、ぼくたちの足じや大人にすぐに追いつかる。

けれどここなら。

速さじやなくて、すばしこい方が勝つ。

それに、あたりのひどがいる。

ハルの言つとおり、これだけ人目があればそんなに無茶なことはできない。

でも、こつちは子供だから、たいていの無茶は大目に見てもうえる。

だから、できるだけ派手に「しなきゃいけない」んだ。

……やっぱハル、頭いいや。

通知表は「もうすこしがんばりましょう」「ばっかりだけど。

「……なんか言つた?」 ちょっとハルににらまれた。

「なんにもー!」 知らんぷりして目をそらす。

だつたら……

「ハル、こつち!」

大きな声で呼びながら、なるべく店に近い、人の多いところを選んで走る。

自転車が止めてあるところのすぐそばで、直角に曲がつて逃げる。後ろの一人が曲がりきれずに、自転車の列に突っ込んだ。

大きな音がして、順番に自転車が倒れていく。

また一人、今度は靴屋の店先に突っ込んだ。

派手な音がして、色とりどりの靴が下に散らばる。

男はそれでもぼくらを追いかけようとして、店員に捕まつた。怒り狂う店員をにらみつけ、立ち去ろうとして、周りの人々に捕まえられる。

「どういうつもりだ、こんなところで!」

「あんな小さい子を追つかけ回すなんて!」

周りの人々に怒られて、彼は動けなくなつた。

それでも、まだ追いかけてくる人はいる。

だんだんコツをつかんできたみたいで、少しづつ手が近づいてくる。

なんとかこいつらの田を、ほかのところに向けないと…

ひらめいた。

「ちょっと待つてね、ハル」

急に立ち止まって、あいつらの方に向き直る。

走ってた勢いで一、三歩後ろに下がってから、手に持つていたリュックを、まるで違う方向に力一杯投げ飛ばす。

リュックは十メートルくらい飛んで、道路の反対側のちょっと小さめの街路樹にぶつかって止まつた。

「しゅーちゃん、カバン！」あわてたようなハルの声。

「いいんだ。お金と証明書は持つてたから。それに、手紙はハルのカバンの中でしょ？」

今度だけは小さな声で。

「……だったら、なんでカバンを捨てたの？」

「手紙がこのカバンに入つてるかどうか、むこうではわからないから。もし手紙がほしいんなら、とりあえず捨てて中身は確かめるでしょ？」

ぼくの説明に、ハルがちょっと泣きそうな顔になる。

「でも、あの中にはしゅーちゃんの大切なもの、いつぱい……」

「どんないじなものでも、ハルがいなくなつたらなんにもならなによ」

そういつて、ハルの手からカバンを取ろうとする。

「ぼくが持つよ。だいじょうぶ、投げたりしない」

そういつて伸ばした手に、でもハルはカバンを渡さなかつた。

「いいよ。わたしが持つてく」

「でも、重いだろ？」

「だつてこれ、私の荷物だもん。しゅーちゃんに迷惑かけるの、いやだよ。じぶんのことじぶんでするの」

「……そつか」

ハルの言うこともわかるから、手を引っ込めて後ろを見る。ほとんど人は減つてなかつた。

平沢さんはリュックを拾いにいったけど、誘拐犯達はそっちには目もくれずに追つかけてきてる。

あわててまた走り出す。

「こわい？」なんとなく、聞いてみた。

「ちょっとだけ。でも、すつじくおもしろい…」

楽しそうな声で、ハルが言つ。

「やっぱそうか。ぼくもだよ」

こんなこと、普通じゃ絶対にできないし。

ひとりではこわいだるつけど、となりにはハルがいる。

だったら、だいじょうぶ。どんなときでも。

お互に顔を見合させて、笑つて。

それからまた走りだした。後ろの男達を振り払つため。

遠くから、男達の怒鳴り声が聞こえる。
声はどんどん大きくなつて、田の前を通り過ぎ、やがてだんだん小さくなつていく。

そのうちに、完全に声が聞こえなくなつた。

しばらくしてから、頭の上の水色のふたに手を伸ばす。
かぱつ、と音がして、ポリバケツのふたが開いた。

大通りの一つ入った裏路地。あたりはビルの水道管や配線ばかりで、人の姿は見えない。

となりでハルが頭を振つて、

「あーあ。せつかくいい服着てきたのに。ビハビハー……」

ちょっと悲しそうに言つ。

「それより、これからどうする?」

「もう一度、おんなじことして駅まで……」

「駅までは行けるだる。でも、それからどうするの?」

あいつらはまだこれからもぼくらを追いかけ続けるだらうし、こんな騒ぎになつた以上警察も動き出すかもしれない。お父さん達も、たぶん必死になつて探すはずだし、ずいぶん心配してると思つ。

……うちに帰つた方がいいかもしけない。
けれど、それまでにあいつらに捕まつたら、今度こそどうにもならない。

とりあえず、注意しながら表通りへと出る。

右を向いて、左向いて、また右を確かめたところで肩を叩かれた。
とつをにハルを後ろに隠して飛びのく。

「……そんなに驚いた?」

「どうかで聞いた声。

「……東さん？」朝、電車の中で助けてもらった人だ。

「どうしたの、」となんといふで？「不思議そうな顔で、東さんが聞いてくる。

「ちょっと事情があつて……」

ぽかして答えるとしたら、逆にそれが興味を引いたらしい。

「なにに。おねーさんに話してみなさい」

『おねーさん』をやけに強く発音して、東さんが言つ。

ハルと、顔を見合わせる。

答えはすぐに出た。

この人は、信用できる、と思つ。朝だつて、会つたばかりのぼくらを助けてくれたし。

「ちょっと長くなるんですけど……」

そう言つて、ぼくはこれまでのことをゆっくりと話しだした。

「……だったら、家に来ない？」

ぼくたちの話を聞き終わると、東さんはもう言つた。

「でも、もし誘拐犯達に見つかつたら、東さんまで……」

「だいじょうぶ。どうとでもなるわよ」

なぜか自信たつぱりに、東さんが言つ。

「でも、それが何とかなつたらちゃんと帰るのよ」

その言葉に、ハルが考え込んで、

「じゃ、お願ひします」とぼくは言つた。

「しゅーちゃん！？」

ハルが驚いた顔をする。

「だつて、このままじや逃げ切れるかどうかわからないし。ハルが残念なのはわかるけど、みんな心配してんだから。今はいつたん

落ち着いて、帰るしかないと思つよ」

そう言つと、ハルはちょっとの間すくへ難しい顔で考え込んで、

「……わかった」ただけ、答えた。

とても、小さな声だつた。

車に乗り込み、ジルの中の駐車場をでたといひで、あいつらの車を見つけた。

「ははあ。あいつらね」

あいつらが、こちらに気づいて、あわてて車に乗り込んでいく。

「ど、どうするんですか？」

「どうするもこうするも」

そうこうして、東さんはこいつとほほえむ。

……なんだか、寒気がした。

「しつかりつかまつてなさいね！」

「つ、つかまつて……」

最後までしゃべることはできなかつた。

車がいきなり、ものすくいスピードで走り出したから。

急ブレーキとクラクションの音。

そのたびに、ぼくとハルは後ろの座席を転がり回る。

後ろの車がついて来るどころの騒ぎじゃない。

ものすくく楽しそうな声で、東さんが言つ。

「一度やってみたかったのよね、カーチェイス」

……ひょつとして、捕まつた方が安全だつたんぢゃ……

「東さん東さん、信号赤！」

「え、赤は注意してすすめつてことじやないの？」

「なんかメーターから音が鳴つてるー。」

「たかが50キロオーバーじゃない」

「もう、誰も追つかけてきませんよー。」

「まだまだわかんないわよー！」

……もうたぶん、何を言つても無駄な気がする。

なんとか手足を突つ張らせて、ハルが転がらないように抱え込むしか、できることはなかつた。

しづらへじて、車は小さなアパートの前に着いた。

「なんとか無事についたわね」車から降りて、満足げに東さんは言つ。

「……無事？」

真っ青な顔のハルを見ながら、ぱんぱんとぱくぱくはつぶやいた。ハルに肩を貸して、アパートの一階へ。

「おじやまします」

きちんとあこがつして、家の中にはいる。

小さいけれど、きれいに整頓された、あたたかな感じの部屋。廊下を通りて、奥の部屋へ。

電話の横に立てかけてある写真が、ちょっと仮になつた。セピア色の、もうずっと前に撮つたらしい写真。

「なにしてるの？」

「……うん。なんでもない」

写真を置いて、また歩き出す。

キッチンに通されて、ジュースを出してもらつ。

「それじゃ、とつあえず……」

そういういかげたところだ、奥から泣き声が聞こえてきた。

赤ん坊の泣き声だ。

それを聞くと、東さんはすつ飛んで出でこつて、しづらへじてから小さな赤ちゃんを抱えて戻つてきた。

「いめんね、話の途中で」

そういうながら、東さんは優しく赤ちゃんをあやしてこぐ。

「お子さんですか？」

「そうよ。かわいでしょ~」

嬉しそうな顔で、東さんが言つ。

けれど、泣いてる今は、あんまり可愛ことは思えない、悪いけど。

と、ハルが赤ちゃんに手を伸ばした。

ほっぺたのあたりを少しつづく。
びっくりして泣きやんだ赤ちゃんは、ハルの手を不思議そうに見て、
ゆっくりと手を伸ばす。

そのまま、ハルの指をぎゅう、とつかんで笑い出した。さげんが
直つたらしい。

しばらくハルの指で遊んでいた赤ちゃんが、東の方に顔を向
ける。

何か、聞きたいたいだ。

「あ、まだご挨拶してなかつたね、駿君。遙お姉ちゃんと周哉お兄
ちゃんだよ。こんにちはの」「あいさつは?」

東さんの声に、駿くんは笑つて手を振る。

「こんにちは、駿くん」ハルのあいさつに、
「ねーたん?」さつき覚えたばかりの言葉で、駿くんが聞き返した。

「うん、ねーたん」

それからぼくの方を向いて、

「ねーたん?」

「ううん、にーたん」

「ねーたん」

何度も繰り返した東さんが、ちょっと肩をすくめる。

「ごめんね、まだこの子言葉あんまり知らないから

「いいですよ」

ちょっと弓をついた声で、ぼくが言ひ。

その間に、下に降りた駿くんはせじへはい回つていた。
あたりのクッショニにじやれついたり、ハルやぼくのそばに寄つて
きて、ぺたぺたとさわってきたり。

ちつともじつとしない。

「ひりー！駿くんー！おねーちゃんたけにめいわくでしょーー！」

東さんの声にも、全然やめる気配がない。

「いいですよ、かわいいし。ぜんぜん迷惑じゃないですー！」

駿くんの手をかわしながら、ハルが囁く。

確かに、ちつともいやじやない。なんだか、見るだけで顔がゆるんでしまう。

いつもなら、おじさん達に頭をなぐられるのだけていやなの……。

……なんでだる？

「ずいぶん氣に入られたみたいね」

東さんが苦笑いした。

「そうなんですか？」

「ええ。いつもはもつと人見知りするし、あんなに早く泣きやまないのよ」

「ハルは誰とでもすぐに仲良くなれますから」

「そんな感じね……」

「いいな、うちにもいないかなあ、赤ちゃん……」

テレビの台上に上り下りする駿くんを見ながら、ひりやましそうな声でハルが囁く。

「そうでもないわよ、毎日世話するの大変よ？」

「そうこいながら、東さんは本当に嬉しそうだ。

その言葉に、ハルは自信たっぷりに答える。

「だいじょうぶ。しゅーちゃんの世話で慣れてるからー。」

「……おー」

ぼくが抗議する前に、東さんがくすくす笑いながら、言った。

「だったら、また会いに来る？駿も喜ぶと思つし」

「うんー。」

ぼくとハルの返事が一緒になつて部屋に響いた。

第十四話 推理

「……伏見さん、今なんて言いました？」

「……わざわざ。

お父さん、おじさんと電話して、じいじいびどく怒られてから、おじいちゃんのところに電話した。

おじいちゃんは畠守らしく、代わりに電話に出た伏見さんは、ひとりおり怒って心配したあと、いきなりこういってだした。

「あの手紙は、ちゃんと渡して置いて欲しいわづです」と。

「ちょっと待つてください。でも、その手紙のせいに変な人に追つかれられて……」

「やむは必ずなんとかします。……詳しく述べませんが、そつ言つた伏見さんの声は、いつもとはまるで違つて、すじみがつて。

「それでも、ハルをそんな危ない田には……」

「なんとか食い下がつたぼくに、すまなさそうな声が聞こえる。周くんたちには悪いけれど、おじいさまがどうしてもとおっしゃるので。申し訳ありませんが、お願いします」

びつくりした。伏見さんは礼儀正しいけど、ぼくらに頼み事をする時にこじまでていねいなことばを使う人じやなかつたから。

「よつぼじ、だいじなことなんですね」

「どうしても」という感じが伝わってきて。

なんとなく、断れなかつた。

電話を切ると、急に今日一日の疲れが押し寄せてきて、ぼくは床の上に転がつた。

「つかれた……」

ソファーに寝転がつて足をばたばたさせながら、ハルが言つ。

「あれから、まだ一日もたつてないんだよ？」

「うん」

「でも、おもしろかったねー」「んな」と、ゆづ絶対にできなことよー。」

「……うん」

氣のない返事。

あおむけになつて、ぼうつと天井の蛍光灯を見る。

それが、ふいに暗くなつた。

「しゅーちゃん。どうしたの？『元気ないよ？』

頭の上に、心配そうなハルの顔。ソファーの上からぼくをのぞき込んでくる。

「もうおわったんだしさ、もっとうきだそうよ」

「ハル。まだ、なんにも終わつてないんだよ」

頭の上でのんきな顔してのハルに、ぼくは言った。

「あの人達が誰なのか。どうして、ぼくたちが誘拐されたのか。平沢さんは誰に命令されて動いてたのか。誘拐犯達は誰と手を組んでいたのか。なんにも、まだ。

それがわからんきや、またおなじことになるかもしれないよ？」

「もうだいじょうぶでしょ、なんとか逃げ出せたんだし」

「わかんないよ。これから無事がどうかもわからん。だつて、この事件のこと、まだなんにもわかつてないから」

ぼくの言葉に、ハルもすわりなおして、顔をしかめて考える。

しばらく考えてから、

「しゅーちゃん、なんか考えついてるんでしょ？それから教えてよ」少し首を振つて、ハルが聞いてきた。

「ちょっとだけ、ひつかかることがあるんだ」
考えをまとめながら、ゆづくつ話し出す。

「あの誘拐犯達、どうしてあの倉庫にいたんだ？」

「……どうしたこと？」

「ドーラマとかだと、ふつう犯人はひとけのないところにぼくらを閉じこめると思うんだ。空き家とか、つぶれた工場とかさ。でも、あの倉庫は今でもちゃんと使つてるんだよね。中身入つてたし」

「それがどうかしたの？」

「使つてる倉庫なら、警備員がいたり防犯システムがあつたり、すると思うよ。中身盗まれたら困るでしょ？でもあいつらは、そんなの気にもしないでの倉庫使つてた」

「……あの倉庫の社員だつたら、使えるかも……」自信なさそうに、ハルが言つ。

「ただの社員が防犯システムをどうかできるとは思えないよ」

「ていうと？」

「これはぼくの想像なんだけど」そういつて、言葉を続ける。「『裏切り者』の持ち物なんじゃないかな、あそこ。そつじゃなくとも、彼のにらみの利くといふ。だとすれば、あれだけ勝手に使えた説明ができる」

「ぼくのことばに、ハルはおとなしく頷いている。

「それから、もうひとつ。どうして平沢さんは、あんなにタイミング良くぼくたちを助けられたの？」

「？」言われたことがわからなかつたみたいで、ハルの頭に大きなクエスチョンマークが浮かぶ。

「だつてさ。ぼくたちが逃げ出して、捕まりそうになつたといふでいきなりあらわれて、

誘拐犯達を倒してくれた。なんか、見せ場を狙つたような感じがない？」

「……外で、ずーっと見てたんだ！」ハルの目がまん丸になる。

「たぶんね。でも、それよりもっと大きな疑問があつてさ。

……そもそもなんで、平沢さんはぼくたちが閉じこめられていたと

「どうがわかったわけ？」

「警察もおじいちゃん達も、ぼくたちがあそこにいることなんか知らなかつたはずだよ。知つてたら、すぐに動いたはずだし、だいたい誘拐されて一時間も経つてなかつたんだよ? どんな名探偵でも、まず見つけられないと思つんだけど」

ハルが言葉の意味を理解できるまで、少し待つ。

「偶然……じゃないよね」

「もちろん。そんなことあるわけないよ。……知つてたんだ、平沢さん。ぼくらがどこに閉じこめられてるか

「あとをつけてきたとか?」

「夜行列車の男みたいに? たぶん、それはないと思つな。誘拐犯達だつて警戒してただろ? し、ぼくらだつてちゃんと注意してたでしょ?」

「すると、どうなるの?」

「……せつぎ、誘拐犯達が平沢さんとでくわしたとき、あんまり驚いてなかつたよね」

「うん。なんか、知り合いであつたみたいな感じだったね。簡単に中に入れちゃつたし」

「……知り合いでたんだよ、たぶん」

「……どうこいつこと?」

「仲間だったんだ、平沢さんと誘拐犯

「! ?」

「なんで、そうなるの?」びっくりしたらじいハルが、急いで聞き返す。

「平沢さんは、誰かの命令で動いてたんだよね」

「うん」

「それは、たぶん『裏切り者』だよね」

「うん」

「『裏切り者』は、誘拐犯達ともくんでたんだよね」

「……うん」

「だったら、平沢さんと誘拐犯が仲間でもおかしくないよ」

「たぶん、平沢さんが直接『裏切り者』から命令されて、誘拐犯達と連絡を取つてたんだよ」

「……誘拐犯達は、『裏切り者』をしらないの？」

「うん。誘拐犯達は、あんまり重要なことを知らされてないと思うよ」

「どうしてそういうの？」

「さっさと。カバンを捨てたとき。平沢さんは拾いに来ただけど、あいつらはそのまま追つかけてきた。それから考えて、あいつらはあの手紙のこと知らないんだよ。たぶん、あいつらは……」

「やられ役」言葉が思い出せないぼくに、ハルの助け船。

「そう、それ！それだよ。最初からやられ役だったんだ、あいつら。本命は平沢さん。

……たぶん、裏切り者は、お金なんか欲しくなかつたんだよ。欲しかつたのは、手紙だけ。

あんなやり方でお金が取れるとは、最初から思つてなかつたんだね。それで、ぼくたち誘拐して。誘拐がうまくいつたら、平沢さんがいかにも正義の味方みたいにしてでていつて、誘拐犯をやつつけてぼくたちに恩を売る。そのときに、いかにも親切そうな顔で手紙を盗めばいい

呆然としているハルに、そう説明する。

「とすると、問題なのは、あの倉庫の持ち主だよね
なんとか立ち直つたハルが、聞いてきた。

「それが『裏切り者』の可能性が高いからね」ぼくも、うなずく。

「なんか、手がかりとかない？」

「うーんと……」

そのとき、思い出したこと。

あの倉庫から逃げ出すとき、ちらりと見かけた、会社の名前。見覚え、ある。

そばの本棚を探し回る。

目指す本は、すぐに見つかった。

「会社旬報」と書かれた分厚い本。

その本の最初の方をぱらぱらめぐる。

「あつた」

「高月製紙」と書かれた欄。

【高月グループ】高月一族が今でも経営権を握る。業務建て直しに懸命。

社長 高月光彦

「……やつぱり、か」

そのページを見ながら、ほんやりとぼくはつぶやく。

「よく考えれば、身内であんなことするのは、光彦おじさんしかいらないんだよ。おじいちゃんがそんなことするわけないし、父さんやおじさん……ハルのお父さんなら、ぼくらを誘拐する意味ないじゃない？」

「それに、光彦おじさんならわたしたちが旅行に行くこと知ってるしね」と、ハル。

「……そうだつけ？」

思い出せないぼくに、あきれ顔のハルが説明してくれた。

「おじいちゃんどこにあいさつにいったとき、会ったじゃない」

そういえば、そうだつた。たぶんあのときには、詳しいことを知ったんだろう。

「……いまわかるのは、これだけ。でも、わかんないよりはずいぶ

んいいと思つよ？」

「ちょっとだけ得意な顔になる。

「……す”こす”こ、しゅーちゃん…」

ハルがいきなり飛びついてくる。

「わ、ハル？」

「たつたあれだけで、よくここまでわかつたね！」

顔が赤くなつた。すつ”じ”く照れくさい。

「でも……」ふいに、ハルが変な顔をする。

「しゅーちゃん、へんだよ」

「どうが？」

自分の推理は完璧だと思つていたから、ちょっとだけむつとなつた。

「だつてさ……」考え込みながら、ハルが言つた。

「そうすると、あの手紙を手に入れるためだけに、倉庫一つ使って誘拐を仕組んだ訳だよね。でも、そこまで大がかりなこと、どうしてしなきゃいけないの？ちょっとカバンをひつたくれば済む」とじやない。なんで、わざわざこんなこと……」

……たしかに、それもそうだ。手紙一つにしては大げさすぎる。

「……そうこえば

考えれば、まだまだわからなることはあつた。

「ぼくも、これだとわかんないことはあるんだ。……どうしておじさんは、今こんなことしたんだろ？」

「……どうじうじとつ？」

「もしおじこちゃんにこんなことがばれたら、ただじやすまないはずだよ。おじさんがあつた」とくらこ、すぐこわかつちやうだらつし

「ほくらでもわかるくらこの計画だ。ちよつと時間が経てば、すぐみんなこぼれてしまつだらつ。」

お互いうつなって、腕組みして考える。

……でも、五分考へても十分考へても、納得できる結論は浮かんでこなかつた。

「降参！」

しばらくして、ハルがひっくり返る。

「わからんないよ、こんなの一！」

「ぼくも、わからんないや」

こつちも床へとひっくり返る。

「これ以上考へたつて、無理だよ」

「うん。犯人は分かつたんだし、あとはおつかに帰つてからでいいか」

そういうて、ハルに笑いかける。

「ほんと、がんばつたからや。あとは父さん達が迎えに来るまで、遊ぼうよ。せつかくの旅行なんだし」

「うんー！」

満足そうに言つたハルは、そのままテレビのリモコンをとる。

「ちょっとテレビみたい。もうすぐ漫画が始まると」

そう言へば、いつもこの時間はハルは家でテレビを見てたな。

「うちの方とこつちじや、テレビの時間違うかもしれないよ？」

「いいのー。つけてみなきやわからんないでしょ？」

そういうて、強引にテレビをつけた。

「経済トップアイの時間です」

真面目そうなニュース。

「ほり、やっぱやつてないじやん、ハル」

「ううー……」不満そうなハルを無視して、チャンネルを変えようとしたとき。

「次のニュースです。……高月電機の元会長、高月作蔵氏が倒れ、

現在手当を受けている模様です」

聞こえてきたニュース。

それはぼくたちが予想もしていなかつたことで。

「きのう午後二時ごろ、自宅で急に心臓の発作を起こし、現在病院で手当をうけているということです。一代で日本有数の電機メーカーを作り上げた立志伝中の人物の入院は、グループ内部に大きな波紋を呼びそうです」

今までの楽しい気分も、せつかく考えた推理も、ぜんぶ吹き飛ばしてしまいうようなものだつた。

第十五話 みたくなかつたこと

「……おじいちゃんが、倒れた?」

今聞いたことが信じられなくて、ハルと顔を見合わせる。

すぐにリモコンに飛びついた。

何度も何度もチャンネルを変える。

あらこりの局のニュースの最後の方で、やつを聞いたのと同じ言葉。

「……そうだ、うちに連絡しないと!」

ぼくの声に、ハルが電話に飛びついた。

うちに電話してみたけれど、誰も出ない。

おじいちゃんも、伏見さんもいない。

何度も何度もかけ直してから、ハルがやつと口を開く。

「だれもいないよ」

「……たぶん、病院に行つちやつたんだ」

「……ていうことば……」

「たぶん、本当だよ。ほんとに倒れちゃつたんだ、おじいちゃん」

「きのうまで元気だったのに。なんで、急に……」

「……元気じゃなかつたみたいだよ、きのう」

驚くハルに、説明する。

「さつきテレビで、なんて言つてた?」

「昨日倒れたりって……」

ぼくの言いたいことに気が付いたらしく。

「うん。ぼくたちが出発するときに、もうおじいちゃんは倒れてたんだ。昨日父さん達が呼び出されてたのは、たぶんそのせい」

「……だから、お父さん達、急に行くなつていつたんだ?」

「やうだよ、やうど。お父さん達、いったん決まったことを理由も

なしに破るような人じゃないもん

そのまま、僕もハルも少しだけ黙る。

「でも、どうして理由をいつてくれなかつたんだろ?」言つてくれた
ら、ぼくだって絶対に行かなかつたよ?なのに、なんで……」

「……言えなかつたんじや、ないかなあ

ハルが、ぽつりといつ。

「どういふこと?」

「ふつうに、ただ倒れただけだつたら、ちやんと教えてくれると思
うの。でも、もしうんと重い病氣で、……どうにもならないような、
そんな病氣だつたら……」

ハルの言葉に、この間挨拶にいたときのことを思い出す。
言われてみれば、あの時のおじいちゃん、いつもよつずつとやつれ
て見えた。

いつもなら、ぼくたちが遊びに行つたら、どんなに具合が悪くても、
ぜつたにふとんにねたままなんてことはなかつた。

ふつうに、自然に笑つてたから、気が付かなかつたけれど。

「……確かに、全国ニユースで流れるくらいだもんね。ちょっと倒
れただけなら、そんな大ニユースには……」

ぼくの声に、ハルはいきなり立ち上がつた。

「早く帰らなきや! おじいちゃん、死んじやつよ!」

そういうなり、自分の荷物をまとめてはじめる。

「しゅーちゃんは?」

「ぼくはさつき荷物捨てちやつたから。すぐに準備できるよ

「じゃ、はやく!」

今にも飛び出しあつたハルを落ち着かせようと、

なにか、ひつかつた。

おかしなことに気が付く。

「……待つてよ、ハル。おかしくない？」

「なにが？」焦つているせいが、いつもよじとがつた声。

「だつてさ。さつき電話したとき、伏見さんそんなこと言つてた？」

「……そういえば」

「言つてないよ、ね」

「おじいちゃんが倒れたんだつたら、すぐに戻つてこいつに西つはずだよ。伏見さんだけじゃない、父さんもおじさんも」ぼくの言葉に、ハルの動きが止まる。

「へんだよ。ぜつたい、おかしい」

「じゃあニコースが嘘ついてるの？」

「それはないとと思つ。もし、あるとするなら……」

「ふと、おもいついたこと。」

「父さん達が、ニコースの人につそをついてるのかも」

「どうして？」

「……わかんないけど」

倒れたのを隠すならわかるけど、倒れてないのを倒れたという理由がわからないし。

「ハル、携帯持つてる？」とつあえず、もうこわどかけてみよう。

「あ、うん」

ハルの携帯を見てみる。着信は、ない。

「ハル。電源きつてた？」

「ううん。ずっとつけたままだつたよ」

ハルが答えて、

「どうして、電話かかってこなかつたの？」

二人一緒に声が出た。

「おじいちゃんが倒れたのつて、きのうだよね。だつたらどうしよう

誰からも電話がかかっていないんだろ？」

「子供が家出したんなら、普通はまず携帯に電話するでしょ？警察だのなんだのは、そのあの話。なになんで、着信一つないの？」

僕の疑問に、ハルも頷く。

「ふつつ、まず電話かけると想つんだ。ほくらだつて、やつしたでしょ？助かったときに、すぐに父さん達に連絡したし」

「うん、へんだよ。絶対におかしく」

眉間にしわを寄せた深刻そうな顔になるハル。

「ほかに、おかしなこと、こっぽいあるような気がするよ」

「例えば？」

「なんで、ぼくたちこんなことひにこるの？」

「？」

ハルが首を傾げる。

「ふつつ、誘拐とかだつたら、もつと逃げ出すの難しいと思つんだ。少なくとも、ぼくたちみたいな子供にあつさつ逃げられると想つ」

「そういえば……」

「あつちこつちで、ぼくらに都合がいいことが起きたから。だからなんとか逃げ出せたんだ。……でも、なんでそんなに都合のいいことが立て続けに起つたんだろう」

ぼくの言葉に、ハルは腕組みして考え込んだ。

「それから、もうひとつ。この、手紙のこと」

そういうて、ハルのカバンの中からあの手紙を取り出す。

「結局この手紙のせいだ、みんな大騒ぎしてるみたいだ

ぼくの言葉に、ハルも頷く。

「この手紙、そんなに大事なものなのかな……」

「たぶんね。あの人達が必死で盗もうとしてたんだし」

「そういうことじゃなくて……」

何かいいたそうなハルをさえぎつて、疑問をぶつける。

「……でも、だとしたら、なんでおじいちゃんはぼくたちにそんな大切なものを持たせたんだろ？」

「どういづいと？」

「そんな、誘拐までして手に入れようとするくらい大事なものなら、普通はもつと信用できる大人に頼まない？ぼくらよりも、もつと上手に安全に手紙を持つていける人に」

ハルの目が、こっちがびっくりするくらい大きく開いた。

「わたしたちがちょうどこっちに来るから、ついでだつたんじゃないの？」自信なさそうに、ハルがつぶやく。

「だつたら会社の人たちだつているし、ほかにも頼める人なんかいくらでもいるじゃない。わざわざこんな子供に持たせることはないよ。……ぼくたちに渡させる理由が、何があるんだ」

「どんな理由？」

「……それは……」

「そうやって、考えているうしが。」
『気づいたこと。

「……ハル」

いつもより、ずっと低くて小さな声で、ハルにきいてみる。

「光彦おじさんに、ぼくらの予定なんか言った？」

はじめ、不思議そうな顔をしていたハルが、さつと顔色を変える。

「……言つてない。しゅーちゃんにとめられたんだよ、たしか！」

「そうだよ、ハル。おじさんは、ぼくらの動きを知らなかつたはずなんだ。どこへいくかまではわかつても、予定表なんか知つてゐるはずがない。だれか、知つてゐる人が教えたんだ」

「誰が？誰が教えたの？」

「わかんない。一応知つてゐるのは、ハルんちのおじさん、お父さん、

それからおじこちゃんなんだけど」

「三人とも、わざわざ光彦おじさんとおんなじと教えたとは思えないと
いよ」

ハルの言葉に頷くとして。

「……ちよつと待つた」

なんか、胸の中がざわざわする。
すじく嫌な予感。

「じつしたの、しゅーちゃん?」

様子が変わったのに気づいたらしく、心配そうにこちらを見るハル。

「……最初から、考えてみよみ」

むづくつと、話しだす。

「最初、ぼくらは旅行に行けなかつたんだよね? 旅行に行けるよう
にしてくれたのは、誰?」

「おじいちゃん」ちよつと変な顔をして、ハルが答える。

「あの手紙を、ぼくらに持たせたのは?」

「おじいちゃん」

「出発する前に、おじいちゃんが倒れた」と、ぼくたちに向かえさせ
なかつたのは?」

「……? お父さん達じゃないの?」

「これじゃまだ、わかんないよね」僕は少し笑つて、
「お父さん達に携帯をかけさせなかつたのは?」

「…? おじいちゃん?」

「うん。お父さん達はぼくらの旅行に反対だったし、そんな事情が
あるならすぐには『帰つてこい』って電話すると悪い。それをしなか
つたのは……」

「おじいちゃん本人に、止められたから?」

「……うん。父さん達個人の都合だつたら、絶対にそんなことはしないと思つんだ。それより、すぐに帰つてきて欲しいと思つてたはず」

「……だとしたら、わざわざ電話したとき、父さんや伏見さんには、帰つてこいといわせなかつたのも?」

「おじいちゃん、だらうね」

「……おじいちゃん、なんでそんなことを?」

ハルの疑問に僕は答えず、次の質問を口にする。

「……これが当たつてゐるなら、リーフの筋書きを全部書いてたのは?」

「おじいちゃん」

「だよね。今いつたことが全部できるのは、おじいちゃんしかいないよね」

少し、声がうわずつてゐる感じ。ハルが変な顔をした。

「とあると、おじさんとぼくたちの予定を教えたのは?」

「おじいちゃん」

「やつだね。でも、そつすると、」

一度、言葉が切れる。その先を言つのが怖かつたから。なんとか言葉を続ける。

「……ぼくたちを、誘拐、されたのは……」

果然とつぶやくハル。

「……おじい、ちゃん……」

ぼくもハルも、しばらく何も言えずに黙つていた。

「なんこと、考えもしていなかつたから。」

「で、でも!」どうにか声を出せるよつになつたらしいハルが、あわてたよつて聞いてくる。

「光彦おじさんならともかく、じつはおじいちゃんがそんなこと

しなきやいけないの？おじこちやんせ、お金もいらなし。もちろん、手紙なんかいはづがない。もともとおじいちゃんが書いた手紙なんだから。なのに、元気で手の込んだ」と、びくびくしてしなきやいけないの？」

「わかんないよ」ぼくは、小さく首を振る。

「でも、今いつたことができるのは、おじいちゃんしかいない。何か大事な理由があるんだ、何か……」

その何がが、今のぼくにはぜんぜん思いつかないけれど……

「……その理由って、わたしたちより大事なの？」

ハルが叫ぶ。

「どんな理由か知らないけど、わたしたち誘拐して、しゅーちゃんあんなめにあわせてや。そんなことまでしなきやいけない、どんな理由があるの！」

ぼくには答えられない。

「わたしたち、遊びに来ただけだつたのに。どうしてみんな、こんな勝手なことばっかり。

父さん達もおじいちゃんも光彦おじさんも。みんな……だいつきらい！」

体の底からしほりだしたみたいなハルの叫び声だけが、ぼくとハルのほかに誰もいない部屋に、こつまで響いていた。

第十六話 おおじない

「どうして、おじいちゃんが、そんなこと?」

少し落ち着いたらしいハルが、ぼくに聞いてくる。

「わかんないよ」

「おじいちゃん、わたしたちのこと嫌いだったのかな?」

「わかんないよ」

「おじいちゃん……」

「わかんないよ……」

つい、怒った声が出た。

ハルがびくつと身をすくませる。

「……ごめん、ハル。ハルはなんにも悪くないのに」

「……いこよ。しゅーちゃんの気持ちも分かるし」

ハルの声を、半分聞き流す。

頭の中ぐろぐろで、何も考えられない。

たぶん少し、落ち着いた方がいい。

このままだと、いい考えが浮かぶ前に、もつとひどいことをハルに言つちやいそだから。

部屋の中を、ぐるっと覗回す。

東さんと駿くんは、わざわざこかに出かけてしまった。

だからこの家には、今はぼくとハルしかいない。

ソファー、クッション、テレビ、カーペット。

落ち着いた感じの、いじいじの良やかつな部屋。

テレビの上においてある、小さな写真立てが皿についた。

来たときに電話のところで見かけたのとおんなじ、小さなセピア色の写真。

どこかで見たような気がすると、わざと思つた写真だ。

手に取つてみる。

古い工場と、前に並んだ……

……思い出した。

あれを見たのは、確か。

記憶が巻き戻つていぐ。

ハルと一緒に逃げた町。倉庫。にぎやかな通り。夜行列車。電気の消えたぼくの部屋。おじいちゃんの家。宿題。ラジオ体操。ハルと、はじめてあつたとき。

昔のカメラの、使い終わつたフィルムみたいに、記憶は音を立てて巻き戻つて。あるべきところおわまつて。かちり、と音がした。

ハルの田の前に、きちんと座り直す。

「……ハル。ちょっと、お願ひがあるんだけど」「どしたの？ しゅーちゃん。急にあらたまつて」

あわててハルも座り直した。

「あの人たちにまで、行きたい。今すぐこ、手紙をとどけな」とたんに不機嫌になるハル。

「あんな目にあつたのに、まだおじいちゃんの言つことおへの？」
「そうじやないよ。ちょっと、聞いてみたいことがあつてさ」「何を聞くのよ」まだどがつたままの声で、ハル。

「今度の事件のこと」

「……あの人気が、何か知つてるの？」意外そうな声。
「たぶん。この計画とはなにも関係ないだろ？ けど」「どうこつこつ？」

不思議そうなハルに、ひとことだけ言つ。

「わかった……かもしない。ぜんぶ」

「わかった……って、こんどのこと?」

「うん。ほんとかどうかはまだわからないけど、そしてぼくは、さつき思いついたことを残らずハルに話した。長い時間をかけて、考え考え。」

「え……だつて、だつてだつて……」

「今度の旅行に来てから、ハルの驚いた顔を見るのは、何度もだつて、「でも、これだつたら、どうしてこんなことになつたのか、わかるでしょ?」

ぼくの言葉に、しぶしぶつなづくハル。

「……それなら、おじこちゃんのしたことは、わかるよつた気がするよ。許してなんか、絶対にやらないけど」

「……でも。それ、ほんとなの?」

「わかんない」

ぼくの言葉に、ハルが不安そうな顔になる。

「でも、ぼくにはこれしか思いつかない。少なくとも、いまは。だから、確かめに行きたい。いまから、すぐ」

「そんなことしなくても、あしたおとーせんたがとこつしょにいけば、事情がわかるんじゃないかな?」

「……それじゃ、だめだよ。ぼくたちの聞きたいこと、たぶん聞けない」

「出発の時のことを思い出す。」

「たぶん、あの時と同じみたいに、『ぼくたちのため』で、父さん達は絶対に本当のことを言わないだろ?と思つんだ。」

「……そんなの、いやだよ。」

「うして、こんなことになつたのか。」

だが、こんなことしたのか。

そんなこともわからないままに、知らないうちに誰かの道具にされても。

光彦おじさんもおじこちゃんも父さん達も、みんなぼくたちの「」と道具扱い。

それで、最後までほんとの「」とは教えてもらえない。

「冗談じやないよ。絶対にいやだ。

だから、ぼくとハルで、全部解いかやしたい。

誰かに、誰かの都合がいいようなことを聞かされるんじゃないで。いつかで全部解いちやつて、みんなに突きつけられ。ほんとの「」と、しゃべらなきやいけないようにしようよ」

ぼくの言葉に、ハルはちょっと笑つて、せつひとつと頷いた。

「「」めんね、迷惑かけて」

「迷惑なんかじゃないよーでも……」

心配そうな顔のハル。

「……しゅーちゃん、こわくないの？」

「怖いよーもし違つてたら」「わいし、本当だつたらもつと怖い。でも……」

まだ言おうとするぼくを止めて、ハルが言つ。

「……おまじない、してあげよつか？」

「おまじない？」

「うそ。元気が出でくるおまじない」

「めずらしいね、ハルがそんなこと言つなんて」

ハルはあんまりそういうこと信じなかつたと思つたけれど……

「いいからー」

びっくりするくらい強い声で、ハルが言つ。

……」「うそとかは、逆らわない方がいい。

「で、どうすればいいの?」「

「セヒのソファーに座つて、ちょっと皿をつぶつて、かいたい、

開けちゃだめだよ!」

「うん。……これで、いいの?」

いわれたとおりに皿をつぶつて、じっと待つ。

なかなか、始まらない。

聞こえてくるのは、息を整えるハルの呼吸だけ。がまんできなくなつて、なにするつもりなのかハルに聞こいつとしたとき……

ぼくの顔に、小さくて柔らかい何かがおしあてられて、すぐに離れた。それが何か気がつくの?、一瞬だけかかった。ハルの唇だ。

「……ハル!?」驚いて皿を開けると、「だめだよ、皿開けちゃ」真っ赤な顔のハルが、恥ずかしそうに笑つていた。

「……元気出た?」

「え、でもそのちょっと……」

あんまりあわてて、声が出てしない。そんなぼくを見て笑つてから、ハルが話し出す。

「心配する」となによ。

おじいちゃんやお父さんやおじさんとが何を考えて、どんなことをしたとしても。

わたしはずつと、しゅーちゃんの心地いいから。なにがあつても、絶対にね

まっすぐにぼくの目を見て。

「だいじょうぶ。いつだってしゅーちゃんは、わたしのセイばにいてくれたでしょ？今日みたいに、大変なときはいつだって助けてくれて。だつたら今度は、わたしが助けてあげる。しゅーちゃんが泣いたりしないように」

ゆつくりと、でもだれよりもしつかりと。

「いまのは、約束。ゆびきりのかわり」

真つ赤な顔のまま、ハルははつきりと言つた。

「好きだよ、しゅーちゃん」

そこにいたハルは、いつもとなりにいる、あのハルで。けれど、いつものハルとはまるで違つて。

だから、ちょっと横を向いて、

「ありがと」
とだけしか、言えなかつた。

しばらぐ、そのままでいたあと。

「ねえ、しゅーちゃん。おねがいがあるんだけど……」小さな小さな声で、ハルが言つ。

「なに？」

聞き返すと、ハルは真つ赤になつて、
「わたしも、約束してほしー」

ハルのいつた意味を、ちょっとだけ考えて。

「しゅーちゃんがいやならないよ！わたしが勝手にあんなことしただけだし」

あわてて両手を振るハルに、そんなことないよといいたくて。でも、なんだか照れくさかつたから、黙つたまま。かちこちに固まつた体を、なんとか動かして。

しばらく迷つてから、田を閉じて待っているハルに、同じおまじないをしてあげた。

第十七話 到着

「東さんに話は？」

「しないほうがいいと思う。話してもだいじょうぶだとは思うけど、もし違つたら、ね」

ちょっと申し訳なさそうなハルに、笑いかける。

「それに、もし東さんに頼んだら、あの運転を我慢しなきゃいけないんだよ？」

ぼくの言葉に、ハルも笑つた。

「荷物は置いていこう。荷物を持つていかなかつたことがわかれれば、戻つてくるつもりだつてこと、信じてもらえると思う」

持つてくものは、あの手紙だけ。

短い書き置きを残して。

「ひさしひやつて逃げ出すの、今度で何度目かな？」

「これで最後だよ。きっとね」

そういうて、ハルの手を握つて。
ぼくたちはまた、そつと家を出た。

人通りの少ない裏道から、大通りへ。

待ち伏せしている人はいない。

伏見さんの言ひとおりに何か手を打つたのか、それとも単純に見失つただけなのかわからないけど、ぼくらにはとても都合が良かつた。地図を見て、案内板を見て、なんとかあたりをつけながら駅へと急ぐ。

人ごみを逆に走りながら、電車に。
知らない駅から知らない駅へ。

人ごみの中は、まぎれこむにはちょうどよかつた。

あたりの人もみんな、こっちに注意もせずに通り過ぎる。だれもいないみたいに。

知らない町の知らない場所で、知らない人に囲まれて。

ハルと二人きり。

ここにはこんなにひどがいるのに。

……なんだか、怖い。

ハルの手を少し強く握る。

ハルは、ちょっとだけ驚いて、すぐにぼくの手を握り返してきた。

何度も何度も乗り継いで、田舎の駅へ。

小さいけれどにぎやかな駅前で、地図を確認。

「どっちなの？」

「うーんと……あっち」

細長くのびている商店街を、人のすくない方に。

「見張ってる人、いないよね」

「たぶんね。もうおじさんにぼくらを追いかけ回す理由はないはずだもん」

おじさん以外はどうかわからなかつたけれど、それでハルは安心したらしい。

「じゃ、いくよ！」

そうじつて、どこまでも続く道をいきおいよく走りだして。

……迷つた。

「三番目の角だから、ここだよ！」

「だつてここで右に曲がったんだから、その先は……」

商店街も終わり、あたりには大きなお屋敷が建ち並んでいる。

大きくて、ぼくらには塀しか見えない。

道がこんなに入り組んでるなんて思わなかつた。

まづくらな通りのあちこちに、寂しくぽつんと街灯が立つ。

道行く人も、誰もいない。

「……やつぱり、怖いよ」

今度はハルが、ぽつりといった。

「……うん

これまで、ずっと追っかけられていたから。

こわいなんて思つてゐるひまがなかつた。

ハルと手をつないで、必死になつて逃げていれば、それでよかつた。けど、今は。

知らない町の真ん中に、ほうりだされて。

今ぼくたちがどこにいるのか、それさえもわからなくて。

……いのまま、どこにもつかなかつたら、どうしよう。

「こんど誰か通つたら、道を聞こひ」

ハルに、そつといつてみたけれど。

「いや！」

ハルは思い切り首を振つた。

「もう誰にも、話なんか聞きたくないよ。どこに誰がなにするか、わかんないもん。平沢さんみたいな人がまたいたら、どうするの？」

ハルの言つことは、わからなくはなかつたけど。

「でも、このままじゃ、いつまでもあの人たちまでいけなによ？」

「それでも、いや」

がんこに首を振り続けるハル。

……しようがない。

あきらめて、またハルの手を引いて、歩き出す。

だんだんと、ハルの歩きが遅くなつてきた。

「だいじょうぶ？ 疲れた？」

返つてきたのは、

「しゅーちゃん、ねむい……」

緊張感を全部「ふつとばすみたいな、ハルの声。

「 もうちょっとがんばれよ。あとちょっとなんだからね」

……ほんとかどうかは、ぼくも知らないけど。

「 だいじょうぶ、へいきだよ」

言葉だけは元気なままで、ハルが答える。

なるべくゆっくり、ハルが疲れないように歩いてく。

それでも、道はわからない。

同じところを、ぐるぐる回る。

見覚えのある屋敷の角を、三回回ったとき……つないでいたハルの手から、ふんやりとちからがぬけた。そのまま、地面に崩れ落ちる。

「 ハル！？」

あわててかけよったぼくの田の前で。すうすうとねいきをたてて。

気持ちよさそうに、ハルは眠っていた。

「 おいハル、おきりい！」

ペちペちとほつぺたをたたいてみる。ゆすぶつて、耳元で大声を上げて。それでも、ハルは起きなかつた。

……まったく。

「 しょーがないなあ」

大げさにため息を付いて、ハルを背負う。

「 今日、つかれたもんな……」

これは、ぼくのわがまだから。

これ以上ハルに無理をせるわけにもいかない。

不思議と怖さはなくなつていた。

背中のハルの、幸せそうな寝息。

とりあえず、ハルだけは間違いなくそばにいる。
それだけで、ずっと気持ちが楽になつた。

「ハル、重いぞー……」

今考えたことがなんとなく照れくさくて、ひとつ「と」を重ねつてみる。
「重くなんかないもん……」

いきなり背中から声が聞こえてくる。

「おきてるなら……」

聞こえてくるのは、規則正しい寝息。

「寝言か……」

ひとつため息を付いて、またハルを背負い直す。

だんだん、足取りが重くなつてきた。
考えてみれば、ぼくだって疲れてるはずなんだ。
でも、こんどは誰かに助けてもらうわけには行かない。
ぼぐが言い出して、ハルまで巻き込んだことなんだから。
そこまで、やらなくちゃ。

それから20分くらいたつて、やつとぼくは目的地にたどり着いた。

時計を見る。

……もう十時か。

大きなお屋敷。

「仁科」と書かれた表札に目をやつて。

くつつかやうになる目をなんとかこらえて、大きな門の前に立つ。

ハルをおぶつたまま、玄関のチャイムを押す。

インターホンから、品の良さそつなおばあさんの声がした。

「はいもしもし。どちらさまでしょうか?」

「夜分遅くすいません。高月周哉といいます。後ろにいるのが、従

妹の遙です。

おじいちゃん……高円作蔵から手紙を預かってきました」
インター ホンの向こうで、息をのむ 気配がした。

「受け取りたくないかもせんけれど、どうか受け取つてもら
えないですか? ぼくたちも、そのことで聞きたいこと、こつぱいあ
るんです」

返事は聞こえない。

足が、がくがくする。

でも、これはぼくたちだけで、やうなきやいけないことだから。
だんだん、気が遠くなってきた。

それでもなんとか、残つた力で言葉を続ける。
「お願いします。ほんとに、ごめんなさい。

……ねばねばあります……」

ぼくが覚えてこるのは、それまでだった。

第十八話 おはよー

休みの日はいつもベッドのなかで寝ていて、半分寝たまま、とうとう起きてしまう。

とくに今は夏休みだ。学校のない日がずーっと続く。ということは、こんな幸せな日が毎日続くということだ。けれど先生も、こんなぐうたらな毎日を生徒に送らせなにようし、ちゃんと陰謀を巡らせてくる。

そしてその陰謀の手先の声が、

……聞こえてこない。

「……？」

まぶたを開ける。

いつもより、ずっと高くにある天井。

寝返りを打つ。

いつもみたいなベッドじゃないくて、大きなふとんの中。

畳に障子。

いつもと、ちがつ部屋。

……あ、やつか。

そのまま倒れちゃって、それから…

(ハルは?)

ハルはどこに?

あわててまわりを見る。

ぼくのふとんのとなりに、なかよくならべられた大きなふとん。ハルはそこにいた。

あわててまわりを見回す、すいすい寝息をたてている。

安心したり、急にいたずらしてやりたくなってきた。

……「れは、チャンスかもしれない。ひ、ひのすいみんせがいのうらみを、こまほはらしてやろひ。

音をたてずに、そーとハルの枕元に。

「……ひつご

なんにもしらずにねむっているハル。

……昨日されたみたいに鼻をつまんでやひつ、顔をのぞかしむ。しあわせうな顔。

……だめだ。ぼくには、できなこや。

ハル、かわいすぎる。

「おはよ、ねぼすけわん」

僕が呼んでもハルはぼーっとしたままで、むらむらあたまをひかしている。

しうがな。

ハルの小さな耳をつまんで、

「起きる————つ——！」

思いつきり叫ぶ。

とびあきたハルは、右を向いて、左向いて、もうこげぐりかえしてからぼくに気づいた。

「……しゅーちゃん？」

「おはよ。ハル

「なにするのー。」

「ひとりでぐづぐづ寝てはうがわるいんだよ

」「ひる様子がおかしことに気づいたらしー。

「……ひー、ひー、」起きるとあたりを見回しながら、ハル。

「仁科さんのねづかだよ。きのつハルが寝ちゃったあと、なんとかひるまで運んできたんだ

「「」ねん…

しゅんとなつたハルを、からかつてみる。

「大変だつたんだぞ。ここまでずるする所がすりてきしれ」

「ええつ！」

自分の体をあちこち見回して、傷がないかどうか確かめるハル。
「つそりや。ぼくも玄関前で倒れちやつたから、たぶん仁科さんが全部やつてくれたんだよ」

「……倒れた？」ぼくの言葉に、ハルの目が光つた。

……まずい。

「あ、えーと……」

「……無茶しちやだめだよ、しゅーちゃん。私が寝ちゃつたからだらうつけだ。しゅーちゃんが倒れちやつたら……」

そのまま、ハルもぼくもだまつこんだ。

「田が覚めたかしら？」

ふすまのむこうから、いきなり人の声がした。
あわてて正座をして、返事をする。

「あ、はい。おはようございます！」

ふすまを開けて、やさしそうなおばあさんが姿を見せた。
どこかで見たような顔。昨日聞いた声。

たぶん、このひとが仁科さんだろつ。

「だいじょうぶだつた？心配したのよ、いきなり玄関前で倒れてるから」

「すいません、ごめいわくおかげして」

ハルと一緒に頭を下げる。

「いいのよ、そんなこと気にしなくとも」

そういうて、仁科さんは笑つた。

「じはんも用意したから。あんまりたいしたものはないけれど」

「すいません、ほんとうに」

もう一度頭を下げる。

「着替えはここに置いておくから。」はじめを食べ終わったら、おつちの人に連絡しなさいね」それだけいって、仁科さんは部屋を出てこり「とした。

「……手紙は？」

ぼくのことばに、仁科さんは顔をくもらせた。

「あなた達には悪いけれど、手紙は受け取れないの。どうしてもね。せっかくここまで来てくれたのに、ごめんなさいね」優しく、でもきつぱりと仁科さんは言った。

「……どうですか？」

「……」

少し硬い声。

「おじいちゃんど、むかし何かあつたからですか？」

仁科さんが何か言いかける前に、

「あの写真で、となりに写っていたひと。仁科さん、ですか？」

「……あの写真って？」

「高月電機の昔の工場の前で、おじいちゃんと仲間のひとたちが写つてゐる写真です。あの写真の、たつた一人の女人の人。おじいちゃんのとなりにいたの、仁科さんですよね？」

もう一度、聞いてみる。

しばらぐ、誰も何もしゃべらなかつた。

「……おじいさんから、話を聞いたの？」

「いいえ。おじいちゃんは、手紙をどうけてほしにしかいこませんでした」

ぼくの返事に、仁科さんはためいきをつぶ。

「やつ……」

「いめんなさい。たぶん、仁科さんは思って出したくないことなのかもしません。

けれど、ぼくたち、どうしてこんなことになつたのか、知りたいん

です。

全部、話します。これまでにあったこと。

どうして、こんなことを考へついたかも。

ひょっとして、おじいちゃんの子供の話なんか考へたくないかもし

れないですか?「話だけでもきいてもらえませんか?」

ぼくのことばこ、仁科さんは小さく、でもはつきりとつなずいてく

れた。

着替えて「はん」を食べてから、ぼくたちが「科さん」今まであったことを話した。

仁科さんは、最後までしつかりと、ぼくたちの話を聞いてくれた。

「……それで、私に聞きたいことって？」

仁科さんが、ゆっくりと口を開く。

「そのまえに、ぼくがどうしても不思議だったこと。それから、話します。あとでつながってきますから」

ぼくの言葉に、うなずく仁科さん。

「最初から、不思議だったんですね」

一度深呼吸してから、ぼくは話しあ出す。

「どうして、ぼくたちが手紙を持つて「いく」とになったんでしょう？」

東さんの家で、考えたこと。

「もつと信用できる大人じゃなくて、わざわざぼくたちが手紙を持つていかんきやならない理由。おじいちゃんが、そこまでして手紙を届けようと必死になる理由。おかしなことばつかりです」

どうして。どうして。どうして。たくさんの疑問。

「でも、それより、一番不思議だったことは……」

「ほんとだったら、こんな事件、ぼくとハルだけでなんとかなるはずないんですね」

ぼくの「おじいさん」、仁科さんが田を見開く。

「あじつらの計画にあちこち穴があつたから。ぼくたちがピンチになるたびに、どこからか救いの手があつたから。だから、ぼくらは

「おまけにこるんですね」

ちひつと、ハルの顔を見る。ハルが、小さくつまづく。

「でも、どうしてそんなに都合よく、みんな助けてくれたんでしょう？」

「おじいさんが手を回して助けてくれたんじゃないの？」と、仁科さん。

「だとしたら、そこからぼくたちをあぶないめにあわせないようになりますよ。全部、仕組まれてたんですね。ぼくらを誘拐して、『危ない町にあわせてからたすけだす』こと。この計画をたてたおじいちゃんには、それは絶対に必要だつたんですね」

「……どうして？」

「……こんどの事件で、いちばんあやしこうしをしたの、誰だつたと思います？」

テレビで見た名探偵みたいに、なるべくもつたこいつをじゅべつてみる。

「……わからないわ

「じゃ、質問をえます。あやしいひとが電車の中でついてきたとき。誘拐犯から逃げ出したとき。助けてくれたの、だれだったですよ？」

「……東さん、だよね」

それまでだまつていたハルが、口を開く。

「うん。でも、どうして東さんだつたんだひつ？」

「？」

「一回田は、別に問題ないです。でも、一回田。町で助けてくれたのも東さんだつたのは、どうしてなんじゅう？」

「列車で助けてくれたひとと町で助けてくれたひとがおなじひとでなきやいけない理由なんか、ないです。」

そんなことをしても、ぼくらが不自然に思つだけですよ、いまみた
いにね。

おじいちゃんが、『ぼくらに知らないよ』とぼくらを裏から見
守つてゐるのなら、一回田…誘拐されたとき助けてくれるのは別
の人じやなきやだめなんです』

「おじいさんが、あなたたちに、わざと自分が関わつていることを
ばらそうとしたってこと?」

「いいえ。だつたら、最初から隠そつてしません。
何か、理由があつたんです。『東さんが』ぼくらを助けなければな
らなかつた理由が」

すつかりぬるくなつてしまつた麦茶を、一気にのみほす。

「それに、誘拐犯から助け出すんですから、強そうな男の人のほう
がよかつたとおもうんです。なにがあるかわかりませんから。
でも、助けてくれたのは東さん。別に強くもないし、ふつうの女の
人。

そのあとに」とだつて、変ですよ。

あんなことがあつたら、ふつうはすぐに警察に届けると思つんです。
だつて、ふつうのひとの手におえないじやないです、誘拐事件な
んて。

なのについで連れて行ってくれて、駿くんにまで会わせてくれて。
なんにもこわがつてないんです。

面倒なことになんかなるはずがない。それがわかつてないと、あん
なことはしないと思いますよ」

一度言葉を切つて、続ける。

「たぶん、知つてたと思います、東さん。この計画の」と。おじい
ちゃんに頼まれたんだとおもいます」

「……どうして、そんなことを?」

「会わせたかつたんですよ、東さんと駿くんに、ぼくたちを「

「科さんは今度こそ、途方に暮れた顔をした。「どうして」と、顔に書いてある。

「ほんやらも、わからなかつたんです。東さんの家で、あの写真見るまでは」

仁科さんの顔が、はつきりとわばつた。

「古い工場の前で、おじいちゃんと仲間達が並んで笑つてゐ、ヤンア色の古い写真。

あの写真、どこかで見たことがある、と思つたんです。どうで見たのか、それを思い出したときに、全部つながりました。
……あの写真、おじいちゃんの家にあつたのと、同じだつたんですね」

「おじいちゃん、あの写真毎日見てました。とくに最近、元気がなくなつてから。寂しそうな顔して、いつもいつも。
たぶんあの写真に写つてゐひと、すこし古いせつなひとだつたんだとおもいますよ」

少しだけ、かおをそらす仁科さん。

「でも、その写真が、なんで東さんのところにもあるんでしょう？」

「あの写真に写つてゐひとは、どうみても東さんじやありません。それなのに飾つてあるところには、東さんにとってあの写真はとても大事なものなんです。

東さんにとって、とても大事なひとが写つてゐんですよ。たぶん」

「おじいちゃんにも、東さんにも、おなじよつに大切なひと。だとしたら、東さんとおじいちゃんの間にほんにか関係があるんじゃないか、そうおもつたんです。
で、そう思つて写真を見ると、こくつか気がついたことがあつて。

あの場所で、隣にいた女のひと。

ほかの人は会社の人で、全員男の人。

たつた一人、見たことのない人。

おじいちゃんと仲がよくて、でもぼくが見たことがない人。

おじいちゃんが必死になるなら、東さんとつながりがあるなら、たぶんこのひとだ、と思つたんです。

あとは、そのひとと「科さんを結びつけるのは、簡単でした」

「おじいさんが私のところに直接手紙を送つてこない理由には、ならないわよ？」落ち着いた声で、仁科さん。

「たぶんにか理由があつたんです。

確かに、手紙を渡すだけだつたら、おじいちゃん本人がいけばいい。

あれだけ必死になるくらいなんですから。

それなのに他の人に頼んで渡してもらつといつゝとは、おじいちゃんが渡せない理由があるんだろうと。

ひょつとして、仁科さん断つたんじゃないですか？
手紙を受け取るの。

だからぼくらにたのんだ。

相手がこどもなら、何もきかずにおいかえすようなことはしないだろうと、おじいちゃんおもつたんじゃないでしようか？

「そこまでは、どうしてだとおもう？」

仁科さんは、穏やかに言つた。

「もう、わかつてゐるんでしょ？」「

「はい。だからあのときああ呼んだんです、おばあちゃん、と。

東さんのおばあちゃん。駿くんのひいおばあちゃん。

……おじいちゃんの、最初の奥さん。

血はつながつてゐるかまではわからないけど、ぼくたちの、もうひとりのおばあちゃん」

第一十話 せつめつの壇のせなし

「……もしわたしが違つと言つたりへ。」

かたい声で、仁科さんがあぶやく。

「違つんですか？」

ほんとじびつとした顔で、ハル。

「……そう返されると、なんともここにへこわね」

やつこつて、苦笑にする仁科さん。

「やうすると、やつぱり？」

ぼくの言葉に、仁科さんせつなずいた。

「ええ。わたしあ昔、おじこさん……作戦さんと結婚していたこと

があるの。

聞きたかった」とつて、口の上りでしょりつへ。

悲しそうな顔。

聞いてはいけないことだと、わかつてはいたけれど。

「……はい。」めんなさい、こんなこときこちやつて

「いいのよ。ここまでわかつてたら、隠しても仕方がないし。

……でも、どうしておじこさんとここまで連絡をとらなかつたのか。今まで、連絡を取らうとしたしないのか。そこまでは、さすがにわからなかつたみたいね

小さく笑う仁科さん。

「「めんなさい。何か事情があるとは思つたのですが、そこまでは……」

「いいわ。わかるわけないんだから。話してあげる。あまり楽しい話にはならないかもしねないけれど」

そうつて、仁科さんせつまつと語じはじめた。

「昔、腕のよい技術者だったおじこさんは、私と結婚したあと、小さな工場を建てて独立したの。

おじいさんと仲間たちは毎日毎日機械をつくり、わたしはその世話と、事務一般をやって。

お金はなかつたけれど、腕と夢はあつたから。

毎日が楽しかつた。

そのうち腕が評判になつて注文も増えて。赤ちゃんも産まれて。いつまでも、こんな日が続くと思つてた

昔を懐かしむように、仁科さんは話し続ける。

「けれど、そのころ日本は大きな戦争をやつしていくね。おじいさんのところにも、戦争に来るようになっていう命令がきたの。わたしはいやだつたけど、どうにもならない。

笑つて送り出すしかなかつた」

仁科さんは、淡々と話し続ける。

「それからしばらくして、南の島から電報が届いたの。おじいちゃんが亡くなつたつてね

「……？」

一瞬、なにを言われたのか、わからなかつた。

「……でも、おじいちゃん生きてるよ！」

「そうよね。でも、そのころはたまにあつた話なの。もちろん、そのときはそんなこと知らなかつたけれど

「それで、どうしたの？」

「最初のうちは、それでもがんばつてたんだけどね。

会社の方は残つた人達が必死になつて守つてくれてたし

「でも、その時代、赤ちゃんをかかえて一人で生きていくのは大変だつて、みんな…とくに伏見さんが心配してくれたのね。しばらくたつてから、仁科さんを紹介されて、再婚したの。工場のみんなも、祝福してくれた。

私は工場を離れて、伏見さんが中心になつて会社を続けて。そのうちに、戦争も終わつて。

それなりに幸せだった。あの日までは、そういうて、溜息をつく。

「ある日、伏見さんから電話がかかってきて。『社長が帰ってきた』つて。

あわてて工場まで出かけて、作蔵さんが確かにそこにいることがわかつて。

……出でいけなかつた。

作蔵さんは、帰つてきてくれたのに。私は、あんな電報なんか信じて、ほかの人と再婚して。

会わせる顔がなかつた。

そのまま、作蔵さんに見つからないうに、そつと帰つて。それから、ずっと会つてない

仁科さんの手が、震えているのがわかる。

でも、ぼくもハルも、仁科さんに声をかけられなかつた。

「おばあちゃんは、何にも悪くないよ」といえればよかつたけれど。仁科さんは、そんなことはわかつてゐる。

たぶんぼくらが生まれる前から、ずっととそのことで悩んできたんだ。ぼくたちがなにをいつても、何のなぐさめにもならない。だから、仁科さんの話をだまつて聞いてこることしかできなかつた。

「噂は、いろいろ聞いたの。作蔵さんが別の人と再婚して、子供ができるたこと。とても仲のいい夫婦だつたこともね。

こつちも、作蔵さんには申し訳なかつたけれど仁科とはうまくいつた。とても大切してくれたし

「仁科さん……旦那さんのほうは？」

「……五年前になくなつたわ。大往生……ね

「……すいません」

「いいのよ。わかるわけはないしね」そうこつて、軽く手を振る仁

科さん。

「そのあとも、娘と孫と曾孫…あなた方に会った「東さん」と「駿君」ね…はいたし、今まで特に困ったことはなかったの。

……今年のはじめ、急に作蔵さんから手紙が来るようになるまでは

「……」で一度、仁科さんは言葉を切った。

いや、言葉を続けられなくなつたみたいだつた。

少ししてから、また話し始める。

「何十年も連絡がなかつたのに、急に手紙が届いて。

……怖くなつた。

何十年も昔の罪が、突然目の前に突きつけられたような気がして。

……思わず、捨てたの。

それから、何度も手紙も来たし、電話もかかってきたけれど。全部、無視した。

おじいさんが、今になつて私を責めようとしているような気がして

「おじいちゃん、そんなことあるひとじゃないよ…」

ハルの抗議に、仁科さんはゆっくりと首を振る。

「わかつてゐるわ。でもね…どうしてもダメなの。いまさら、おじいさんの手紙は受け取れない。

おじいさんは、ちゃんと生きて帰つてくれたのに。私は、待つていられなかつた。

いつたい、いまさらどんな顔して、あの人にはねばいいの?」

そういつた仁科さんの顔は、ぼくらよりも何十年も生きてきた、優しいおばあさんの顔と言つより、昨日迷子になつたときのハルみたいな、途方に暮れた顔だつた。

「……それは困るな」

ふいに、玄関の方から声がした。

「おじいちゃん?」

思わず声がそろつてしまつ。

「おじいちゃん、具合悪かつたんじゃないの？」

「……やつぱり、仮病だつたんだ？」

ぼくの言葉におじいちゃんは苦笑にして、

「すまんかつたな、心配せしで」とだけ、いった。

それから、真っ青になつた仁科さんには、優しく声をかける。

「悪かつたな、こんな手の込んだことまでして」

その後ろから、やつぱりぼくたちの知つた顔。

「」めんねーふたりとも、びっくりさせちやつて

「東さんに駿くんまで……」

駿くんを抱きながら、東さんが姿を見せた。

「……まず、私より先に謝る人がいるでしょ？」

仁科さんが、静かに語る。

おじいちゃんはうなずいて、ぼくとハルに頭を下げた。

「悪かつた。こんなことにまきこんで」

「ほんとに」めんね。高円さんがこんなことまで考えてるとは思わなくて。ただおばあちゃんに手紙を渡しに来るだけだと思つてたから

そういうて、東さんがおじいちゃんをにらむ。

「わよつと、やつすぎですよ。たつたこれだけの」とのために……

東さんの言葉に、おじいちゃんがうなだれた。

「なるべくおまえ達がひどい目に遭わないように、手を打つたつもりだつたんだが……」

言葉を濁すおじいちゃん。

と、東さんが頭を下げた。

「すいません、知らなかつたもので」

「いや、いい。伝えておかなかつたわしが悪い」

そうこうして、おじいちゃんも頭を下げる。

「……何の話？」

「ぼくの言葉に、おじいちゃんと東さんは顔を見合わせて。」

「あのね」いいにくそうに、東さんが切り出した。

「あの、電車の中のこと」

「……あの、ぼくらを追っかけてきた人だよね？」

「わ、わ。あのね……」

「あのひと、しゅーくんたちを見張つてたのよ」

「……それが？」 いいたいことが、よくわからない。

「……おじいちゃんの命令で、ね」

「……え？」思わず、ハルと声が重なつてしまつ。

「あのひとね。おじいさんがつけてくれた護衛のひとだつたの」

ハルと顔を見合わせたぼくに、おじいちゃんが説明する。

「いくらなんでも、こんなあぶないことをおまえたちだけにさせるわけにはいかないからな。何かあつたときじ、すぐに助けられるよう」に護衛をつけておいたつもりだつたんだが」

苦虫をかみつぶしたような顔で、おじいちゃんが言つ。

「東さんには『怪しい人が付いてくるかもしれないから、注意しておいてくれ』とはいつたんだが。まさか、護衛を追い払われるとは思わなかつた」

「『ああ、この人が怪しい人だ!』と思つちゃつて」

たつぱり十秒はたつたあとで、ぼくはやつとの事で聞いた。

「……じゃ、あの人とおじさんの関係は？」

「きれいにぱり、なんにもなし!」

「だから、ぼくたちのこと、見張つてたんだ……」

ハルと顔を見合わせて、笑い出す。

結局、なんてことない。

ぼくたちが自分でわざわざ危ないとこへ飛びこんだりただけだったんだ。

ぼくたちが笑い終わつたあと、東さんが切り出した。

「「おんな、おばあちやん。おばあちやん、ずっと隣にしていたのは
知つてたけれど、

……もうそれから、自分を許してあげても、ここと戻つよ？」

「……」

けれど仁科さんは、首を縦に振らなかつた。

「どうして？ これ以上、苦しまなくとも……」

「やつこつこじじゃないの」

きちんと背筋を伸ばし、仁科さんは言つた。

「作戻さん。この子達に謝らなければならぬのせ、本当にそれだけですか？」

仁科さんの視線を浴びて、おじこちやんが皿をそらす。

「ハルちゃん達も、気が付いてるんでしょ？ たつたあれだけの証拠で、わたしたちのことに気が付いたんだものね」

うそは、つかなかつた。

だまつて首を縦に振る。いそどだけ。

「……やつぱり」

ぼくらの様子を見た仁科さんが、おじこちやんに向かへかかる。けれど、ぼくの方が早かつた。

「できるない、あとで言おうと思つてたんだだけだ。

……おじこちやんには悪いけれど、やつぱり許せないよ」

「……周坊？」

となりでハルが、必死に首を振る。

ハルの言いたいことは、わかる。

いま、これを言つことは、たぶんだれのためにもならない。
でも、もうがまんできなかつた。

「ほへらを誘拐した、本当の理由。まだ、話してくれてないじゃない

い

おじいちゃんは、表情を変えない。

ただだまつて、ぼくらの方をみつめている。

もつこちび、くつかえす。

「だめだよ、おじいちゃん。

どうして僕らを誘拐したのか、その説明が終つてないよ」「ぼくのことばに、おじいちゃんは落ち着いて答へる。

「それはせつせ、お前が言つたとおり……」

「だったら、僕らを誘拐しなくたつていいじゃない。

別にそんなことしなくとも、自然にぼくたちと東さんを会わせると、いくらでもできるでしょ？

なのにわざわざ誘拐なんておおげわないとわかれ。

そんなことしたら、いくら護衛をつけてても、ぼくらがどんな目に遭わされるかわからなこよ。

ハルが、心配そうにぼくのお腹を見る。

あこづらに蹴られたところ。今でもまださすがに痛い。

おじいちゃんは、少しだけ顔を曇らせる。

それがぼくを心配してなのか、それとも自分の計画がつまへいかなかつたことにたいしてなのかは、わからなかつたけど。

「おじいちゃん。僕らを誘拐させた、本当の理由は何?」

おじいちゃんは答えない。少し、唇をかんでいる。

しばらく待つたけど答えが返つてこなかつたから、あきらめて話を進める。

「話してくれないなら、ぼくが考えたことを言つよ。絶対にいつだとはこえないけれど、あまりおかしなことは言つてなこと思つ

間違つてくれていたら、とは、何度も思つたけれど。

「おじいちゃん、ぼくたちを囮にしたでしょ。裏切り者を見つけるために。自分に逆らうひとを見つけだすために」

東さんが驚いた顔をした。

仁科さんは、厳しい顔をしてうなずく。

「どうこいつと?」わけがわからぬことこいつた顔で、東さんが聞いてきた。

「おじいちゃん、自分に逆らうひとを見つけたかったんだよ。裏切り者を見つけるために、ぼくらをわざと危ない目に遭わせたんだ」

だ

「どうしてそうなるの?」納得できない様子で、東さん。

「そこから、かんがえてみよつよ」

そうして、ぼくは自分の推理を話し始めた。

「まず、ぼくらの旅行の予定表。あれを知つてるのは、ぼくたちと父さん達とおじいちゃんだけのはず。なのにおじさんはそのことを知つていた。

おじさんに教えたのは、おじいちゃんしかいない。ここまでは、いよいよ」

ぼくの言葉に、仁科さんがうなずく。

「……けど、教えたのはおじさんだけなのかな?」

東さんが不思議そうな顔をした。

「そんなことはないと思つ。たぶんおじいちゃんは、『うちの孫に充分気をつけてやつて欲しい』とかいつて、会社のえらい人たちみんなにぼくらの予定表を配つたかもしれないなつて、思つてゐる」

ハルが顔を上げた。

「これはあとで会社の人聞いてみればわかると思つ。べつにそれ
自体は悪いことじゃないから、すぐに教えてくれると思つよ
「みひつ」

「どうして、そんなことをしたと考えたのかね？」

おじいちゃんは、まだ落ち着いている。

「もしねらいがおじさんだけだったら、ここまで大げさな」としな
くてもいいんだよ。
ぼくらを誘拐なんかさせなくとも、こいつでも方法はあると思つん
だ。

……でも、ぼくらを誘拐しようとするのが、だれだかわからなかつ
たら？」

「！？」

「誰が誘拐するのか。誰があの手紙をぼくらを誘拐してまでほしが
るのか。誰が、おじいちゃんに刃向かおうとするのか。それが、わ
かんなかつたら？」

でも、誰が刃向かうのか、それを見つけたいのなら……」

「わざと手紙をわたしたちに預けるんだね。それで、そのことを裏
切りそうな人全員に教えて、誰が手を出すのか、じつと見てるの」

ハルの言葉に、うなずいてみせる。

「そう考えれば、あそこまで大がかりなことをする理由が説明付く
の。おじさんの他にもあやしいひとがいて、うまくこいつたらそのひ
とたちを全部片づけることができる、そのつもりだったんだ」

「ぼくらを誘拐するのは、おじさんじゃなくても別にいい。誰か裏
切り者を捕まえる」ことができるなら、おじいちゃんはそれでよかつ
たんだ」

話しながら、ちらりとおじいちゃんの方を見る。

この話が始まつてから、おじいちゃんはほとんど表情をえていな
い。ときどき眉を上げたりするだけで、黙つたままじつとぼくの話

を聞いている。

それがどういう意味なのかはわからないけれど。

「準備が整つたところで、おじいちゃんが倒れたふりをする。病院の院長さんかなんかに頼んでね。

それで入院して、まわりのひとにおじいちゃんがもつれくなこと思い込ませる。

おとうさんたちもわざわざ呼び付けて、そのことを知らせたんだ。それで、ぼくたちだけはそのままにしておいて。

おじいちゃん、ぼくらのことあのとき呼んだ?」「…

「いいや。まだおまえたちには早いとおもつたからな

「じゃ、ぼくたちの旅行は止めたの?」

「そんなことはせんよ。お前たち、あの旅行をほんとうに楽しみにしていたからな」

「おじさんたちにも、そういうたの?」

「ああ

「……いつたのは、それだけ?」

ぼくの質問に、おじいちゃんはちょっと黙つて。

それからぼそぼそとはなじだした。

「大事な手紙をあずけてあるから、こまさらとめるわけにはいかない、とは言つた」

「やつぱり。親戚みんなが集まつて大騒ぎの時に、ぼくたちだけ『大事な用』で席を外してたんだ。

危篤のはずのおじいちゃんが、それでも止めなかつた大事な用で「

「おじさん達にしてみれば、大事な用つてなんだろうと思つ。それだけだつたら不思議に思つだけだつただろ?けれど、おじさんはもつと大事なことを知つていた」

「……わたしのことね」仁科さんが、つぶやいた。

「そう。おじいちゃんが死ぬ前に、どうしても渡したい手紙。それはたぶん、遺産とかその関係のことなんだと、おじさんは思いこんだ」

「それで、誘拐になるわけね……」東さんがうなずく。

「もちろん、『大事な手紙』というだけじゃだれも動かないよ。自分たちだってへたに動けば危ないもん。自分たちにも関わってくることだと、思いこませたんだろうね、おじいちゃんは。そういうじやなきや、罷にならないもん」

みんなが納得するのを待つて、話を続ける。

「こうすれば、とりあえず父さん達は僕らの旅行を止めるよ。たとえ『大事な用』とやらがあったとしても、それよりおじいちゃんの病気の方が大事だからね。

そして、父さん達はぼくらに旅行を止めた理由をいえない。

『おじいちゃんが倒れて、ひょっとしたら死ぬかもしれない』なんて、そう簡単にぼくたちに言つわけに行かないもんね。

当然、ぼくらは納得しない。ぼくとハルの性格なら、たぶん何とかして抜け出して旅行に行く。

父さん達が止めなきや止めないで、なんの問題もない。

おじいちゃん、ここまで計算してたんだ

「予想通りにぼくらが抜け出したあと、おじいちゃんはお父さん達に連絡を取つたんだ。

『ぼくらを旅行に行かせてやれ』と。たぶん、ほんとの理由は言わない今まで。

ほんとの理由を言つたら、ぼくら父さん達でもうひとつていうわけないもん。

何とかして説得したんだ。

だからぼくたちのところに電話がかかってこなかつた。

とりあえず父さん達に探す気がなかつたから

「おまえ達がいつ頃抜け出すかなんて、どうしてわかるんだね？」

「おじいちゃんに聞かれた。声はまだ落ち着いたままだ。

「だつて切符はもう買つてあるんだもん。東京行きの夜行列車の時間なんか、すぐにわかるよ。何本もあるわけじゃないんだから。それに間に合つよにぼくらは出でいかなきやいけないんだから、だいたいの時間は予想がつくと思うよ」

「それで、そのあと。たぶん駅あたりに護衛の人が先回りして、ぼくらを見張るために電車に乗り込んだ。

「ぼくらに付いてくる怪しいひとを見張るためにね」

「ちょっと待つて」東さんが話を止めた。

「最初から誘拐するつもりだつたら、どうしておじいさんはハルちゃん達に護衛をつけたの？」

おじいちゃんも、ハルまでうなずいた。

「とめるつもりなかつたんだよ」あつさり、ぼくは言った。

「『護衛』なんていうから、わかんなくなるんだ。『見張り役』で、いいんだよ。ぼくらを見張る人。

……ぼくらが、誘拐されるのを、見張る人」

「……」

「ぼくらに誰が手を出すのか。その証拠をしつかりつかんで報告するものが、あの人の役目。

……だから、あそこでぼくらがあのひとをまつりあつても、そんなに困らなかつた。

あの人もぼくらの予定は知つてゐるんだから、適当に網を張つて待つていればいいんだよ。

……東さん

「なに？」

「ぼくたちがいる場所、誰に教えてもらつたの？」

「……おじいさん」あきらめたように、口を開く東さん。

「だよね。ほかにいないもんね、教えられる人。

おじいちゃんがそのときぼくらの正確な位置を教えられたのは、護衛の人気がしつかり仕事をしてたからだよ。ちゃんと、見てたんだ。ぼくらが誘拐されるところまで

声が強くなるのが、自分でもわかつた。

「はなし、つづけるよ」

「一、二度深呼吸して、もう一度話し出す。

「東さん、ぼくらの乗つている位置ははじめからじつてたんだよね？」

「ええ

「そこで護衛の人と鉢合わせして、あの人追つ払つて。そして、ぼくらが誘拐される。

けれど、ぼくらが捕まつてる場所は最初からわかつてた。たぶん、だれが裏切り者なのか、ある程度目星が付いてたんだと思う。犯人が誰だかわからなかつたら、もう少し手間取つてははずだよ。あやしいところ、あちこち探さなきやいけなくなるから

「ほんとは、あの護衛の人、が様子を見て助けだしてくれるはずだつたんだと思う。

助けてくれたあとで、自然な形で東さんに会わせればいいんだし。それで、外でずっと待つてた。チャンスが来るのを

「どうしてそこで、しゅーくんたちを助けに行かなかつたの？」東さんの声がした。かなり怒つてる。

「たぶんだけど、おじさんと誘拐犯の間につながりがあるつていう、決定的な証拠が欲しかつたんだと思う。平沢さんが来るのを待つてたんじゃないかな？」

平沢さんの役割は『ぼくらを誘拐犯から無事に助け出して、おじさんとのところにつれていく』ことなんだから、平沢さんがぼくらを殴

つたりする」とは絶対にないよ。

だから、ここまできたらそんなに無理しなくてもいい。「ぼくらの無事を確認してから、チャンスを待てばいいんだ。助けられないなら、それはそれ。証拠は握ってるんだから、あとからおじさんをこつてりと絞つてやればいい。

けれど実際には、ぼくらは平沢さんの嘘を見抜いて、しかもあの倉庫から自力で抜け出しちゃった。だからおじいちゃんは焦つて、東さんを直接助けに行かせることにした。

護衛の人がだいたいの位置を教えて、あとは騒ぎの起らぬようにを探せば、ぼくらはみつかる。

あとは、もう話す必要はないよね」

ぼくが話し終わると、あたりはしーんとした。

だいぶたつてから、

「……どうして、そこまでして……」

東さんが、小さくつぶやく。

「うん。ぼくも、それが聞きたい。

わかんない」とは、あとひとつだけだよ。

……どうして、おじいちゃん、こんなことしたの?」

なにもいわない、表情も変えないおじいちゃん。

それをみたとたん、これまで思っていたことが、一気にあふれ出た。「仁科さんへの手紙? それはたしかにだいじなものだつたんだろうけど、それよりもおじいちゃんは自分に逆らうひとを見つける」とを選んだんだ。

もつと大騒ぎにならない方法だつて、探せばあるはずなのはさ。

わざわざ一番大きな騒ぎを起こして。

たつたあれだけのことのために、ハルをあんな目に遭わせて、仁

科さんや東さん」これだけ迷惑かけてさ。

おじこちゃんにとって、ぼくもハルも科さんも、東さんも駿ぐ

んも、父さんやおじさん達まで。

みんな、ただの道具だつたんだ。

……みんなをおもちゃにして、遊んでたの?

おじこちゃんたゞよければ、それでいいの?

ひとがおじこちゃんの思い通りに動くのつて、そんなに楽しかった

!?

黙つたままのおじこちゃんに、胸の奥からあふれ出でた葉をぶ
つけて。

「なんとか言つてよ、おじこちゃん!」

あいつたけの顔で、ぼくは叫んだ。

それでも、おじいちゃんはなにも言わなかつた。ただうつむいて、何かを我慢しているみたいだ。

それがまた、ぼくを怒らせた。

もつと何か言ってやるうとして、となりのハルを見て。言葉が、出なくなつた。

ハルのようすが、変だつたから。

小さな肩をふるわせて、じつとおじいちゃんを見つめている。田の前のおじいちゃんと同じに、何かを我慢して、口に出せずにいるよつた。口を開いたら、何か大事なものなくしてしまつこうな、そんな雰囲気だ。

「ハル? どうしたの? なんかへんだよ?」なるべくハルをこわがらせないよつて、優しく聞いてみる。

その時、ハルがつぶやいた。

目に涙をいっぱいためながら、小さな小さな声で。

「おじいちゃん、死んじゃやだよ!」

ハルのこつたことばの意味が、わからなかつた。

「どうこつこと?」

「わかんないの、しゅーちゃん?」

おじいちゃんが、こままであせつてことをすすめるわけ

僕からの返事がないことを確認して、ハルが続ける。

「おじいちゃん、こままで無茶なことをするひとじやなかつたはずだよ?」

……確かに。

「わたしたちを旅行に行かせるときだつて、『旅行に行かせなさい

『……なんていわなかつたでしょ？』

「ぼくも、うなづく。

「無理に旅行に行かせようなんて、させなかつたよね。……ああいわれたら父さんが断れないことぐらには、わかつてたと思つけど」「そう。おじいちゃんのやることは、いつでもそなうの。大事なことをさせたいときでも、できるだけ無理をしないように、みんなが納得するようにやつていくの」

「おじいちゃんから手紙を渡されたときだつて、そうだね。『これを持つていきなさい！』なんて、一言も言わなかつた。ぼくらにきちんと頼んで、ついでにおじづかいの話もした」

小さくうなずいたハルが、続ける。

「それなのに、こんどだけ、なんだか別のひとみみたいに強引にやつてる。

『とつても大事な手紙』をわたしたちに預けて、誰か裏切りそなう人にわたしたちを誘拐させて、裏切つた証拠をつかんでからわたしたちを助け出す。それも、東さんに助け出させて、わたしたちの『いとこ』と念わせるようにする

『いとこ』といったとき、ハルの顔がすこし妙な顔になつた。

『いとこ』なんてことばを、あんな年上の人を使うのが、ちょっとひつかつたみたいだ。

「こんな綱渡りみたいなこと、いつものおじいちゃんは絶対にやらない。ひとつ間違つたら、大変なことになるし。

おじさんや邪魔な人を追い払いいたいなら、もっと時間をかけて、確實に慎重にじっくりとやつしていくとおもう。その方が安全だし。それなのに、おじいちゃんはあんなことをした。

……おじいちゃんが焦る理由があつたの。

『ここまで、いいよね？』

ぼくがうなずくのを見て、ハルは続けた。

「普通なら、ゆっくり時間をかけて、問題を解決します。

なのにここまで焦ったのは、

……かかる時間が、もうおじこちゃんには残ってなかつたから。
いつ来るのが、一番普通なんぢやないかなあ？」

ハルの言つたことを、考えてみる。

ぼくらが行つたとき、ベッドで寝ていたおじこちゃん。

「おじいちゃんがたおれたときも、みんなすぐにあつまつたよね。
ただ倒れただけだったら、あそこまですぐには集まらない。みんな
仕事で忙しいし。

それなのに、ぼくら以外はほとんど集まつたんだよね？」

「みんな、おじいちゃんが倒れることを予想してたから、すぐにあ
つまれたんだと思つ」

ハルにうなずいて見せて、続ける。

「おじいちゃんが仮病だつてぼくは思つてたけど、本当の病気でも
別におかしなことはない。ほんとつて、おじいちゃんは……」

もつすぐ死んじやうのかも知れない、とは、どうしてともいえなかつ
た。

「倒れたのは嘘かも知れないけど、その……悪い病気なのは間違
ないとと思う。

このままだと、危なつてことも

東さんが、質問してきた。

「おじいさんが危なつて言つたけど、こまことにおじこさんいるじ
やない」

「もうすぐ死ぬのと危篤なのは違うんぢやないかなあ。おじこちゃん
はもうすぐ死んじやうのかもしれないけど、今はまだ元気に歩け
る。そういうことだと思つ」

ハルの言葉に、東さんは黙り込んだ。

「つまり、じつじつこと?」

ハルの言つたことを、自分なりにまとめてみる。

「おじいちゃんは、自分がもうすぐ死ぬことがわかった。

死んでしまうのは仕方ない。

だから、死ぬ前に、どうしても心残りなことを、まとめてやつてしまおうと思つたんだ」

ぼくのことばに、ハルは悲しそうな顔で、でもまつやつと「なまかに

「科さん」に謝る」と、自分に逆らつひとを見つけていた……」

「うん。違つよ」

ハルの言葉に、首を振る。

「おじいちゃんが心配だったことは、確かにふたつ。

ひとつは「科さんのこと」。

でももうひとつは、おじいちゃんに逆らつ人たちをみつけることなんかじゃないよ」

「どうして?」

「もうすぐおじいちゃんが死んじゃうなら、そこまで無理して逆らつひとを見つけなくてもいいんだ、ほんとば。じつせおじいちゃんが死んだあとのことなんだから」

「じゃ、どうして」んなことしたの?」

「おじいちゃんが心配したのは、ぼくたちのこと

「わたしたちのこと?」

ハルが不思議そうな顔をした。

「うん。おじいちゃんは会社の経営から手を引いたけど、株とかはそのままだし、財産だってあるよね?」

それを狙つて、だれがどんな風に動くかわからぬ。

それを狙つて、だれがどんな風に動くかわからぬ。

おじこちやんが死んだあと、そんなトラブルに僕らが巻き込まれるのを、止めようとしたんだよ」

「 もうおじこちやんが死んでない、トラブル！」

「 うそ。今、起こった。ほんとだつたら、おじこちやんが死んでからトラブルのはずなのに」

「 ……？」

ハルが、ちょっと首を傾げる。

「 おじこちやんが、わざわざ今トラブルを起こす理由は、ひとつ。……いつかは起きるトラブルから、できるだけぼくたちを守る」と

納得できないハルに、なるべくわかりやすく説明してみる。

「 去年の日本脳炎の注射のこと覚えてる?」

ぼくの言葉に、ハルが顔をしかめた。

「 ああ、あの痛いやつ」

「 ハル、注射嫌いだつたよね」

思い切り大きくなづくハル。

「 ほんと、どうしてあんなことしなくちゃいけないんだうね?」

「 なんでだとおもう?」

聞き返したぼくに、ハルはきょとんとした顔で、

「 なんでつて……病気にならなにように……」

「 うん。多少痛くても、病気になるよりははずつとましだから。

……今度のことも、それと一緒になんじやないかな?」

「 あんなひどい田にあつたのに……?」

叫ぶハルに、できるだけ落ち着いた声で答える。

「 でも、あれだけですんだ」

「 ?」

「 おじこちやんがあちこちに手を回してたから、あれだけですんだ。

思い出した、ハル。確かにぼくらを誘拐させたのもおじいちゃんなんだ
けど、東さんにぼくらを助けさせたのも、やつぱりおじいちゃんなん
んだ。

おじいちゃん、ぼくらがあまりひどい田に遭わなによつて、ころこ
ると手を打つてくれた。

おじいちゃんがいなくなつてから何か事件が起きたら、あんなもん
じやすまないよ。

でも、今だったら、おじいちゃんの力で事件を押さえ込むことがで
きる。

おじいちゃんの田が届くつちに、取り返しのつかないことにならな
いうちに、わざと事件を起させたんだ。

今事件を起させれば、それほど被害も出ないままおわるから。
おじせんやおじさんと協力した人たちは、今度の事件を起させたこ
とで動きがとれなくなるだらつて、罰もあると思つ。そうすればお
じいちゃんが死んだあと、ぼくらがトラブルに巻き込まれることも
なくなる。

そうこうつもりだつたんだ

「それだけだつたら、わたしたちをわざわざおとりなんかに使わな
くとも、もつと確実で安全なやりかた、あるんじやない？」

ハルが首を傾げる。

「そしたら、東さんや駿くんぼくらを会わせられないじやない」

「べつに、東さんに会わせるためだけなり……」

「せつを言つたじやない、ハル。おじいちゃんには、もつ時間がな
かつたつて。

仁科さんに、確実に手紙を届ける方法。ぼくたちを、自分が死ん
だあとトラブルから守る方法。ぼくたちを、東さんや駿くんに会
わせる方法。これだけのことを、ひとつひとつ解決していく時間は、
もう残つてなかつたんだ。

ほんのちょっとしか残つてない時間で、心配事を全部片づけあや

うにま、乱暴でも一度にまとめて事件を起しきりやつしかなかつたんだ……」

ぼくの説明で、みんなが黙つた。

ぼくのこつたことを、ずっと考へていろりつ。

まだ黙つたままのおじこちゃんの顔を、じつとみつめる。さつきはああこつたけど、あの推理は当たつて欲しくなかつた。「そんなことない」とこつて、笑い飛ばして欲しかつた。けれど、おじこちゃんはだまつてうつむいたままだ。

そのとき。

「……わかりました」

静かに、仁科さんが口を開いた。

さつきまでと同じ、落ち着いた優しい声。

だから、仁科さんが言つた言葉が、一瞬わからなかつた。「ハルちゃん達の言つていることは、本当なんですね」

「どうしてわかるの?」

不思議そうな顔をしたハルに、仁科さんは優しく言つた。

「作戻さんのことぐらいわかるわよ。一度は結婚してたんだしね」

「だつたら、おじこちゃんと……」東さんが言つかけたけど、

「それでも、ダメですよ」

静かに首を振る仁科さん。

「どうして?」

「これはもともと、おじこちゃんが悪いわけじゃないもの。悪いのは、私。

『おじいさんが亡くなつた』なんて話を信じて、別の人と結婚なんかしてしまつて。

おじこやんに会わせる顔がないの。

おじこやんに謝られるようなことじやない。

わたしが、おじこやんの前にいる資格はないの、寂しそうに、でもはつさつと「科さんと言った。

おじこやんが何か言いかけて、口を開ざす。

「科さんと言葉には、われくらに重みがあった。

やうこつ「科さんの手が、かたく握りしめられてこねり、でもぼくは氣づいた。

おじこやんには手が見えないようにしていたけれど、ぼくやハルの頭の位置ならよく見える。

「科さんがそんなことを言いたいんじゃないからこそ、ぼくにもわかった。

ほんとば、おじこやんと仲直りしたことぐらい。けれどそれが簡単にできなことか、同じくひこみくわかった。

わかりたくなんてなかつたけれど。

「科さんも、おじこやんも、ぼくもハルも、言いたことはいくつもあるの」。

相手のことを考えて、自分のしてしまったことを考えて。

結局だれも、しゃべれない。

ただ黙つて、相手の顔を見続けるしかない。

こまやうなこといけない」とせ、そんなことじやなこせすなのよ。

「……ねえ、しゅーわやん」

黙つたままのみんなを見ながら、ハルがしゃべる。
「これからやることに、びっくりしたりしないでね」

「？」

「……？」

「……うん」

なんだかわからなかつたけど、とりあえずうなづく。

「だいじゅうぶ。わたしにまかせて」
そうこうして、ハルが笑う。
いつも、自信があるときの笑い方。
いつももつむつられて、少しだけ笑う。

田の前では、あいかわらず黙つたまま、おじこわやんと「科さん
がにらみ合つてこね。
怖くなるくらいの静けさの中で、

「しゅーわやん！」

ハルの叫び声が響きわたつた。
みんなの視線が一齊に集まる。
そして、ハルは。
思い切りぼくを抱きしめて。

今度はみんなの田の前で、もうこわい。

あのおまじないをしてくれた。

田の前には、ハルの恥ずかしそうな顔。
それはびっくりしたけれど、約束だつたから。
なるべく平氣な顔して、いつでもハルを抱きしめる。

みんな、動かなかつた。

おじいちゃんも「科さんも東さんも、いつかみて呂然としている。
あつけてとられるみんなの前で、

「だいじなものなんでしょ？」

ちょっと赤くなつた顔で、ハルが叫ぶ。

「ほしいものはほしいって言わないと、なくしちゃつてもしらない
よ」

ぴつたりとぼくに体を寄せて、ハルは続けた。

「……わたし、しゅーちゃんと誘拐されたとき、思ったの。
いまここでしゅーちゃんがいなくなつたら。しゅーちゃんがけがし
たり、どこか遠くに行つちやつたりして。
そんなの、絶対嫌だつて。

わたし、しゅーちゃんはほしいもん。
どんな」としても、ぜつたに。

なくしたくなつて、思ったの」

ぼくの体に回された手に、力が入る。

「おじいちゃんと科さんは、どうなの？」

おじいちゃん、いなくなつちやつかもしれないんだよ。」

ハルの言葉で、一人とも少しだけ、意地をはるのをやめたらしく。
にらみあつのをやめて、おちつかなげに田を伏せる。

……そつか。

だからハル、いきなりこんなことしたんだ。

いきなりこんなことすれば、おじこちゃんに「科さんを絶対びつ
くつする。

それはもう、ものすごく。

たぶん、今に「み合ひ」になるとおもつておじこちゃん。

ぼくたちが普通におじこちゃん達を説得しても、たぶん言ひ方と
なんか聞いてくれない。

こんな子供に言われなくたって、ほんとせどりすればここのかくら
い、二人ともわかつてゐるだらうし。

けど、おじいちゃんも「科さんも、ぼくたちよつもずっと長く生
きていて、そのぶんいろいろなものを貰つてゐる。
そのために、動けない。

だったら、ほんのやうなきやいけなことは?
決まつてゐる。

どうすればいいのかなんて、大人のきちんとした意見じやなくて。
「じいじも」としての、意見。おじこちゃんたちに見えていない、素
直な気持ち。

それしか聞いてくれないのは、悔しいけれど。

……だから、一人が素直にほんの話をちゃんと聞いてくれるよ
う、一度頭を真つ白にさせなくけやうにけなかつたんだ。

おじこちゃんと「科さん」が、落ち着いて話しえられるようにな。

やつぱり、ハルにはかなわないや。

いつだつて、正解を知つてゐる。

少しだけ、間が空いて。

「おまえたちが聴い子だと言ひ」とを忘れていたよ
ぱつぱつ、と、おじこちゃんはつぶやく。

「」の間病氣で倒れていたときより、もつともつと少しく見えた。

「まさか、わしのことまで見抜くとはな……」

「さあまでずっと黙っていた、質問の答え。

「……やつぱり、ほんとなんだ?」

ぼくの声に、おじいちゃんがうなずく。

「さすがにおまえ達に言つわけには行かなかつたしな。もつ少し時期を待つつもりだつたんだが」

その「時期」つていうのは、たぶんおじいちゃんが死んだあとだつたんだから、なんとなく思つた。

「おじいちゃん、死んだよ……」

泣き出しそうなハルに、おじいちゃんは優しく言つ。

「なに、そんなに悪い人生でもなかつたさ。会社は成功したし、自慢の孫たちもいる。

孫が三人、ひ孫が一人。それだけできれば、十分だよ

どこか悟つてしまつたような声。

聞くのが辛くなつて、話題を変える。

「ひ孫つて、駿くだよね? 東さんが、ぼくらのことは、どこに」とは……駿くんとぼくたちつて、なんになるのかな?」

ぼくの質問に、みんなで首をひねる。

「ことこの息子……つて、なんていうんだら?」

「ことこのことよ。わかんないから」

あつたりとハルが言つた。

「そんなことより、仁科さんはどうなの?」

「やうだよ。一人とも、こつたい……」

仁科さんとおじいちゃんがゆつべつと皿を合わせる。

「……しかし、いいのか? わしは、おまえたちにあんなことを……」

辛うなおじいちゃんに、ハルが厳しい声で言つ。

「よくなことよ。しゅーちゃんやわたしよ、あんなことするなんて。みんなにも、あれだけ迷惑かけて。絶対に、許せないよ」
その言葉に、おじこちやんがうつむく。

それを見てから、まだ怒った顔のままで、ハルは続けた。

「……でも、しゅーちゃん休ませてあげたいし。ちゃんと、『逃げない』って約束してくれるなら。一回一回だったら、待つてあげないこともないよ」

おじこちやんが、目を一瞬丸くして。

それから、大きな声で笑い出した。

『逃げない』ところのが、ぼくらのひとからだけじゃないことに、たぶん気がついたから。

笑つてこむおじこちやんを横田で見ながら、ぼくは仁科さんに向かって、話しかける。

「おばあちゃん……ぼくらのおばあちゃんですか？」おじこちやんとほほんとに仲が良かつたです。おじこちやんも、おばあちゃんが亡くなつてから、すつじく落ち込んで。会社も辞めちやつて、ずっと一人だったんですね。

……でも、仁科さんの写真は、ずっと大切に持つてました

ハルがとなりで、大きくなづく。

「けれど、長い間ずっと連絡しなかつた。ぼくらのおばあちゃんに、遠慮してたんだと思います。それなのに、今になつて仁科さんと連絡を取つたんですね。

……忘れられなかつたんだと、思います。

ぼくらが言つ」とじやないと思つんすけど。

……だから……

「気にしなくても、いいと思つます。おばあちゃんの」とは、ハルが続きを言つてくれた。

黙つたままの「科さん」に、みんなの視線が集まる。
ぼくも、ハルも、おじいちゃんも東さんも。
じつと、仁科さんを見つめぬ。
しばらくしてから。

「科さんも、小さく、じつとつないじ。
おじいちゃんに歩み寄つて。
ゆづくと、抱き合つた。

じついたままのハルのからだから、力が抜けていくのがわかつた。

たぶん、ぼくのからだからも。
……よかつた。これで、たぶんみんなつまくごく。

東さんが、明るい声で言つた。

「ほらほら、ここからは大人の時間。
おじいちゃんとおばあちゃんも、わたくしのしょーくんとハルちゃん
みたいなこと、したいんだつて」
『『せーいーー』』声をそろえて、わざと思いつきり元氣に答える。
仁科さんとおじいちゃんは、そろつて顔を赤らめて、うつむいた。

東さんにっこり、部屋を出でてく途中で。
まだ聞きたいことがあるのに、坂がついた。
「仁科さん……」
いいかけて、途中で言葉をかえる。
「……おばあちゃん」
仁科さんが、田を丸くした。

「これから、おじいちゃんとおばあちゃんがどうなるか、わかんな
いですけど。
……もし、おばあちゃんがおじいちゃんと仲直りできなくても、

駿君のところに遊びに行つても、いいですか？
おばあちゃんが、何か答えるより早く。

「ねーたん」

駿君の声がした。

東さんの胸元に抱きかかえられて。

はしゃぎながら、ゆっくりとぼくらに手を伸ばす。

ぼくとハルは、顔を見合わせて。

それからそつと手をつないで、

その手で、駿君の小さな手をしつかりと握りしめた。

もう一人の「いとこ」の手を。

「しゅーちゃん、お手紙きたよー」

夏休みもあと一週間になつたある日。

ハルが白い封筒をもつて、窓から部屋にやつてました。

「誰から?..」

「おじこちゃんとおばあちゃんー」

結局あれから、すぐに父さんたちが迎えに来てくれた。

ハルは怒られて、ぼくは殴られた。

「ハルちゃんを危ない田にあわせたから」ださつだ。

おじちゃんは少しずつ元気がなくなつてきているらしこれど、
今のところまだ倒れてはしない。おばあちゃんと仲直りできたから
かもしだれない。

仁科さんとおじこちゃんは結局仲直りして、最近はおじこちゃん
が向こうに行くようになつた。

おじこちゃんは少しずつ元気がなくなつてきているらしこれど、
今のところまだ倒れてはしない。おばあちゃんと仲直りできたから
かもしだれない。

「まったく、あの年であんなに熱々じや、じつがたまんないわよ
なんて、東さんが電話でぼやいていた。

ハルとは、あのあとあまり変わらなかつた。

いつもどおり、毎朝襲撃に来て、さやあさやあさわいで遊びに行
つて。

……ただ、遊びに行く時に手をつなぐようになった、
それからたまに、ほかにはだれもいないとき。
……あのおまじないを、するよつになつた。

「……で、手紙はなんて書いてあつたの？」

ぼくの質問に、ハルは手紙をひらひら振つて、

「『夏休みの旅行の続き、しませんか？』だつてさ」

机の上に、手紙を広げる。

手紙の中には、おじいちゃんとの生活のことや、駿君や東さんた

ちのことが、ていねいにわかりやすく、あたたかく書かれていた。

そうして、その長い手紙の最後には、

「遙ちゃんも周哉くんも、まだ夏休みは残つてますよね？」

あの時のお詫びをしようと思います。

ちゃんとお父さん達の許可も貰つてありますし、駿も会いたがつ
ています。

切符を同封しますので、もし都合が良ければまた遊びに来てくださいね」

との言葉と、長くてかたい一枚の切符。

「新幹線の切符だ！ちゃんと往復、一人ぶん入つてる！」

ハルと顔を見合わせて。

にんまり笑う。

それから切符をひつつかんで、一人で一緒に走り出した。

父さん達の気が変わらないうちに、さつわと準備して行かなきやいけない。

ハルの手を握つて、階段を駆け下りる。

「あの時いけなかつたところ、みんな回りうね！」

「今度は邪魔も入らないだらうし、全部回れるよね」ハルの言葉に、

うなずいて。

「じゃ、こいつよー

……今度も一人でー」

おしまー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n61860/>

だいぼうけん

2011年1月4日18時46分発行